

「ずっと好きだった」

エコー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

総武高校三年生の秋を迎える奉仕部の面々。

翌春に大学受験が控えているというのに女子バンドを結成、文化祭に参加することになります。

言いだしつぺは受験に一番危機感を持たなければならないはずの由比ヶ浜結衣。

はてさて、どうなることやら。

目次

1	由比ヶ浜結衣はひとり気を吐く	1
2	比企谷八幡は天使に弱い	4
3	葉山はりア充の本領を發揮し始める	7
4	男子バンドは最初から難航する	11
5	女子集えばどうしても恋バナに花が咲く	14
6	由比ヶ浜結衣は決意する	19
7	雪ノ下雪乃は回顧する	22
8	兄は妹に、姉は弟に	25
9	川崎沙希は呼びたがっている	29
10	比企谷八幡は思い出す	33
11	葉山隼人は見せつける	37
12	材木座義輝と比企谷八幡はどこか通じ合う	41
13	一色いろはと葉山隼人は結託する	45
14	比企谷八幡は未だ逡巡している	48
15	比企谷小町は奔走する	52
16	幕は開け比企谷八幡は	56
17	想いは遙か彼方へ	61
18	彼ら彼女らの舞台は仮初の終焉を見る	65
19	比企谷八幡は決意する	69
20	祭りのあとは始まりでもある	74
21	彼と彼女と彼女の物語はまだ終わらない	78
22	月影 【後日談】	83

1 由比ヶ浜結衣はひとり気を吐く

1 由比ヶ浜結衣はひとり気を吐く

入学式当日に事故で入院という波乱の幕開けを切った俺、比企谷八幡の高校生活は三年目の秋を迎える。

この時期になると、進学組はみんな挙って予備校に通い、来年明けの入試を見据えている。

それは、俺たち奉仕部の面々も同じであった。

いや、正確には同じだと思っていたのだが、例外が我が部にいた。

「ねえヒツキー。今年の文化祭ってどうする?」

その例外とは我が奉仕部が誇る巨：ムードメーカー、由比ヶ浜結衣だ。

「どうするも何も：俺たちは受験生だぜ。そんな暇は無いんじゃないのか。特におまえ」

国公立文系志望の奉仕部部长、雪ノ下雪乃は相変わらず定期テストは学年一位、途中から私立文系から国公立文系志望に変えた俺も苦手の数学を克服しつつあった。そんな中、未だに呑気に携帯ポチポチいじりながら文化祭の話って。

おまえ私立の文系ならどこでもいいのかよ。危機感って言葉、知ってる?」

「ひっどーい。ゆきのん、なんか言っちゃってよ。」

参考書片手に問題集を解く雪ノ下に助けを求めろ。

「由比ヶ浜さんには申し訳ないけれど、今回ばかりはヒキガエル君が正しいと思うわ」

そう言いながら、こちらを向いて左目を瞑る。

「あー懐かしいなそれ、お前と出会った当初の罵倒の言葉だな」

あの頃の光景が走馬灯のように甦る。思い出が罵倒の言葉って悲しすぎる。

ペンを置き、参考書を伏せた雪ノ下が、俺を一瞥してから由比ヶ浜を論すような目で見つめる。

「私としては、今年も依頼が無い限りは奉仕部で文化祭に出ることは

考えていないわ」

「ま、部として出展する物もないし、受験もあるし、な」

高校生も、三年の秋ともなると大体が受験の一言で片がつく。いわば水戸黄門の印籠みたいなものだ。誘いや用事を断るときに限っての効力だが。

「んー、そつかあ。去年のバンドとか、楽しかったけどな」

去年、文化祭実行委員長の相模南が閉会式の直前に姿を消した。結局俺が屋上で見つけたのだが、その探す時間を捻出してくれたのが雪ノ下や由比ヶ浜たちの急拵えのバンド演奏だった。

「そうだったな。俺は最後しか観られなかったけどな」

「うん、だから…今度はヒツキーにもちゃんと観てほしい。あたしたちのバンドを」

え、俺観客側なの。オーディエンスなの。青春のページとして一緒にバンドやろ〜とかじゃないんだ。誘われても高確率で断るけど。「面白そうではあるけれど、由比ヶ浜さんは練習時間をとれるのかしら」

私は全然余裕なのだけれど、といわんばかりに雪ノ下は由比ヶ浜を見遣る。

「放課後に二時間くらいなら…大丈夫かな」

由比ヶ浜は自分の学力よりも上のランクの私立大学を志望している。雪ノ下や俺が志望する大学の近くにその大学があるからなのだが、そんなことで一生を左右しかねない大事な決断をしいいのか、由比ヶ浜の人生観を少々不安に感じる。

だから尚の事、由比ヶ浜の勉強の進捗度合いが気になる。それを察したのか、雪ノ下も由比ヶ浜にはバンド云々は諦めて貰う方向で話を進める腹積もりのようだ。

「本来のバンド練習は、短期間で何とかなるような簡単なものではないわ。個人で担当する楽器を練習して、それをメンバーで合わせるだけでも二ヶ月は欲しいところだわ」

文化祭まであと一ヶ月。毎日普通に練習できても厳しい。しかし、こんな事で挫ける由比ヶ浜ではなかった。勉強はすぐ挫けるくせに。

「え、そうなの？だって去年は…」

「去年は、時間を繋ぐ為の急場しのぎだったのよ。何も準備せずにそこそこ上手くいったのは、それこそ奇跡に近いわ」

尤もな意見だ。

だが、高校生活最後の文化祭、何か思い出を作りたいという由比ヶ浜の気持ちも理解出来た。

唸りながら下を向く由比ヶ浜の様子を見て、雪ノ下は一つの提案をする。

「まあ、そのバンドのメンバーが全員楽器経験者なら、短期間でも可能かも知れないわね」

このところ雪ノ下は由比ヶ浜に甘い。以前から甘かったが、最近富にその甘さは加速している。

その雪ノ下の提案に表情を明るくした由比ヶ浜。まだ何の解決法もないのに。

「そうだな。高校最後の文化祭だ。やってみるのもいいんじゃないか。勉強と両立できるなら」

どうせ俺はバンドには参加しないし、という含みを持たせて言う。「ひ、ヒツキーもそう思うよねっ」

俺が肯定することで奉仕部全員の賛同を得た由比ヶ浜は、小さくガッツポーズをする。まるで散歩に連れてつてもらえると判ったときの犬みたいに可愛い。わしゃわしゃしたい。

「ヒツキー、今すぐくく失礼なこと考えてたでしょう、もう」

何故だろう。最近よく思考を読まれる。由比ヶ浜や雪ノ下に限つてだが。あと妹の小町もか。

「いいや、何にも。とにかくだ、頑張れよ。『ガールズバンド』」

暗に「俺は参加しない」旨を含ませつつ、彼女達のバンドの成功を祈った。

2 比企谷八幡は天使に弱い

2 比企谷八幡は天使に弱い

文化祭までの1ヶ月は部活動の時間と場所を女子のバンド練習に充てるらしい。しかも俺がガールズバンドなんて言ってしまったものだから半ば強制的に部室から俺の居場所は消える。

この決定は部長である雪ノ下雪乃が出したものだ。あいつ意外と乗り気だったんだな。ま、大好きな由比ヶ浜にせがまれたら仕方ないか。あいつらある意味相思相愛だし。

故に俺は、しばらくの間お気楽極楽な帰宅部になる予定だ。どうせ依頼なんて材木座の相談メールくらいしか来ないし、ね。

などと文庫本を開きながら愚考していると由比ヶ浜からメールが来た。バンドのメンバーが決まったらしい。

ボーカルに由比ヶ浜結衣、ギターとコーラスに雪ノ下雪乃。ベースは去年と同じく平塚先生に頼むらしい。

メールを読んでいると、その画面を覗き込むように由比ヶ浜本人が顔を寄せて来た。

そう、ここは奉仕部の部室だ。つーか、隣にいるんだから直接言えればいいだろ。

「あとは鍵盤とドラムの担当だけなんだけれど」

雪ノ下が首を捻る。鍵盤とか、なんとかスイッチかよ。いやこの場合はスキマなんとか、のほうがいいか。

「んー、あと条件に当てはまりそうなのは…誰だろ」

由比ヶ浜もたわわな二つの物体を持ち上げるように腕組みをして唸る。

「何だよ、その条件って」

条件か。まずある程度の音楽の素養が無いと短期間でのバンド練習は無理だろうな。

「あ、あゝ、なんでもないっ」

何故か由比ヶ浜の顔が少し赤くなっている。それを見て雪ノ下が微笑むって、本当に仲睦まじいな、おい。思わず和んじっちゃったよ。

「ま、メンバー決まって練習始める段になったら言ってくれ。部室空けるから」

☆

☆

☆

風呂から上がると、スマホに着信があった。リダイヤルで由比ヶ浜に掛け直す。

「メンバー、全員決まったよ」

「なぜ俺に逐一報告するんだ」

俺の疑問なんかお構い無しに由比ヶ浜は話を続ける。ドラムは川崎沙希になつたらしい。そして。

「キーボードは…一色だど？」

一色いろは。現生徒会長だぞ。文化祭の実行委員も兼任するんだぞ。その一色が奉仕部のバンドに参加出来るものなのか。

「あ、あは、なんか大丈夫らしいよ。権力で何とかするってさ」

あいつらしいな。権力とかフル活用しそうだ。

さて、今日の分の勉強を済ませて寝るか。

☆

☆

☆

眠い目をこすりながら教室のドアを開ける。

「おはよう、はちまん」

ドアを開けるとすぐ天使、いや戸塚の席だ。俺はまさしくこの瞬間の為に登校している。

「はちまん、由比ヶ浜さんたち文化祭でバンドやるんだって？」

俺が席に着くなり、戸塚が駆け寄ってくる。テトテトと可愛い足音が聞こえてきそうさ。

「あ、ああ。ガールズバンドだから俺は仲間外れだけだな」

「ぼくも…やってみたいな。はちまんと…」

やるって。

思わずナニを俺とやりたいんだ？ と突っ込みたい気持ちをぐつと抑え込む。

「い、意外だな、戸塚がバンドに興味があるなんて」

「うん、実はさ。中学のときに少しだけベースを、ね」

これまた意外。戸塚に似合うのはピアノだ。深窓の令嬢っぽい。

男だが。いやいや、この華奢な身体で叩くドラムっていうのも何かが萌え上がりそうだ。とにかくベースは意外だということ。

「やるにしても、メンバーはどうする。俺は楽器なんか弾けないぞ。」
「こういうときに思わず嘘を言ってしまうのは、ぼっちの癖だ。防衛本能がなせる業だ。」

「葉山くんはギター弾けるでしょ?」

「葉山か。あいつ今年も三浦たちとやるんじゃないのかよ。それに受験もあるし」

「とりあえず印籠をちらつかせてみる。」

「うーん、聞いてみようかなあ」

意外にも葉山の返事はOKだった。何でも、今年は三浦は受験勉強でそれどころでは無いらしい。ていうか思い立ったら即行動って。戸塚の行動力の凄さったら。

「じゃあ、あとはドラムさんだね」

そこに、タイミングを見計らったように、いや実際見計らっていたのだろう、廊下に立っていた黒い太い影がゆらっと動き、俺とは違う系統のぼっちが襲来した。

「ゴラムゴラム、久しいな我が同胞八幡よ。何の軍議をしておるのだ」
材木座。おまえまだ剣豪將軍とかキャラ作ってるのかよ。その作った笑い声止めろ。早く本物の日本刀持って銃刀法違反で逮捕されればいいのに。」

「…ほほう、そのドラムを我に担当しろと。そういうことなのだな」
「やっぱり聞いていやがった。嫌な予感ほど当たるものだ。なんなら嫌な予感しか当たらない。」

「誰も言ってるねーし。大体おまえ、ドラムなんかやったことあんのか」
「たまにやっておるぞ、ゲーセンで」

「そうだろうな、ぼっちの俺たちにはバンド経験なんて縁がある訳ないよな。せいぜいゲームが関の山だよな。悲しいけど。」

「とりあえずは放課後、葉山を加えた四人で集まって話すことにした。戸塚には申し訳ないがバンドは諦めさせる方向で。」

3 葉山はリア充の本領を発揮し始める

3 葉山はリア充の本領を発揮し始める

「どうしてこうなった」

放課後。俺は、いや俺たち四人は、市内の貸しスタジオにいた。確か：戸塚の願いをやんわりと諦めさせる会、だった筈だが。

いきなりスタジオってハードル高すぎ。材木座なんてキヨドリすぎて売り場のオカリナなんか手に取ってるぞ。それ責任持って買い取れよ。

思い出した。ここに来た理由。

「とりあえず、スタジオの備品の楽器に触ってみないか。っていうことだよ」

という葉山の前向きなおせっかいのせいだ。確かにここなら楽器はひと通り揃ってるけども。

「じゃあ、まずは戸塚から」

椅子に腰掛けて重そうなベースをよいしょ、と柔らかそうな太ももに乗せて弦を弾くのは戸塚。

お、意外と弾けるじゃん。何の曲かは判らないが、ちゃんとベースラインに聴こえる。

「それ、なんていう曲だ？」

「ん、えーっと…」

なぜ曲名を言うだけでそんなにモジモジする必要がある戸塚よ。可愛いから2時間くらい見ていたけれど。

「それって、映画のアルマゲドンの曲だよね」

葉山が代わりに答えてしまう。葉山、戸塚のモジモジ堪能タイムを返せよ。ほら早く。

「…ああ、ナランチャのスタンドか」

空気が固まる音がした。ザ・ワールドかよ。つかバンド名いう方が早いぞ葉山。色々問題あるかも知れんが。

「八幡よ。それは第5部を読んでいないと理解できんぞ」

材木座に窘められた。なんか屈辱。つか何の第5部かいえよ。

第5部的にレクイエムでコイツを葬りたい。

「はは。じゃあ次は、ぎい…くん？」

材木座。さつき自己紹介しただろうが。さすがの葉山もこいつには優しく出来ないのか。

「わ、我が。そのう…実はドラムに触るのは初めてで…」

恥らうな恥らうな。頬を染めるな。おまえには誰もキユンとしないのだから。何をやっても殺意しか芽生えないのだから。

「と、とりあえずやってみようよ。8ビートの叩き方を教えるから」

リア充の空気に気圧されておどおどしている材木座は、恐る恐るであるが葉山がやって見せた簡単な手本通りにドラムを叩く。すると、これも意外なことに結構サマになっている。ゲームとはいえリズム感は養われるのか。

「へえー、本当に初めてなの？」

葉山も感心している。戸塚は目をキラキラさせて材木座を見ている。よかったな材木座、これでもう何も思い残すことはないな。いつでも止めは刺してやるぞ。

「さて、最後は比企谷だな」

あまりにもとんとん拍子で物事が進んで、面食らっている。あ、俺ですか。

「え、ああ。どんなのを弾けば良いんだ」

スタンドに立てかけてあるアコギを掴む。あ、言っておくが、俺はアコギしか触ったことはないし、スタンドってのはスタープラチナとかじゃない。ジョジョ引きずり過ぎ。

「…もしかして、経験あるの？」

ぼっちは、基本一人で出来そうなものには興味を示す。ギターを触る切っ掛けもそこにあった。

「少し、ほんの一瞬だけアコギを弾いたことがある。中学のときに親父のギターを」

一番最初に弾けた曲は「あの素晴らしい愛をもう一度」なのは内緒。

「じゃあ、簡単なコードを弾いてみようか。ストロークで、C Am

F Gの順番で」

何か俺だけ難易度違わないか、葉山よ。悪意が透けて見えるぞ。それくらいなら覚えてるけど。

ピックを持ち、ローコードでCを押さえ、かき鳴らす。Am、次はFつと。

「へえ、ちゃんとバレーコードも押さえられるんだ」

何気なく弾くと、葉山から感嘆の声が漏れる。

バレーコードっていうのは、ここでいうとFのコード。一本の指で6本の弦全部を橋を渡すように押えるコードだ。たいていの夢見るギターキッズ達はここで一度挫折する。俺も一度は挫折したが今年の春に突如出来るようになった。一週間かかったけど。

「はちまん、かつこいいい…」

ただのストロークだ。しかもダウンストロークだけ、初歩の初歩だ。それを誉めてくれるとはマジで戸塚ルートありえるな。逆にそれ以外の道は無しまである。

「みんな…思ったより出来そうだね。で、どんな曲をやろうか」

葉山がリーダーシップを発揮し始めたが、あくまでこれは戸塚のバンド。

「戸塚、おまえがリーダーだぞ。発案者なんだから。曲もおまえが決めていい。あ、簡単なのな」

そう。やりたい曲よりもやれる曲を選ぶこと。それが大事。

「うん、みんなはどんな曲がやりたい？」

即座に材木座が「アニソ…」と言い掛けたので目で黙らせて、その目を葉山にスライドさせる。

「やつぱり、みんなが知ってる曲がいいかな。文化祭に来るのは同年代だけじゃなく、ご両親や先輩方、卒業生、それに近隣の方々も来るからね」

優等生らしい、いかにも葉山がいいそうなことを葉山がいう。葉山つばいな葉山。

「じゃあ、ドラマの主題歌とか、CMの曲あたりか」

「演奏時間は去年と同じなら20分だから、だいたい4曲くらいは必要だな」

「じゃあ、次のミーティングは明後日ってことで、その時各自2曲ずつやりたい曲を持ち寄ろう。」

こういうときは葉山のリーダーシップが活きるな。嫌味とかじゃなく、マジで助かる。

でも、あくまで戸塚彩加のバンドなのである。

それだけは譲れない。

4 男子バンドは最初から難航する

4 男子バンドは最初から難航する

「はろはろ〜」

バンドのメンバーで集まることにしたサイゼリヤ。俺と戸塚が入るとすでに他の面々は着席していた。葉山に、材木座に、海老名…？
「おい葉山説明しろ。なぜ海老名がいる」

実は海老名は男だった、みたいな戸塚チツクなことはないよな。もしそうなら、海老名の趣味は性癖に転じてしまう。ぐ腐腐。つか戸塚はちゃんと男の子だ。決して男の娘ではない。

「い、いやあ、比企谷たちと文化祭で有志バンドやるって言ったら観た
いって…」

ナニを見たいんだよナニを。言って御覧なさい、この腐女子め。

「いいじゃんいいじゃん。練習なんですよ？ 結衣達には言わないからさ」

諦めの溜息をひとつ。

「いいけど、まだ曲も決まってるぞ」

そう。今日はどんな曲をやるか、つまり演目を決める為の集まりだ。

各自が持ち寄った曲は

葉山 「会心の一撃」、「Cry Out」

戸塚 「Walk This Way」、「悲しみの果て」

材木座 「ユキトキ」、「春擬き」

俺は… 「ずっと好きだった」、「歌うたいのバラッド」

さて、各自の曲が提出されたところで、気になるところをイジって
いこう、のコーナー。

葉山は、なんと言うか、やっぱり葉山だな。青春を謳歌してる若者が知っていきそうな曲だ。言い換えれば、チャライ。RADなんかなんてバンド、知らなかったし。

戸塚は…すごく意外だ。男が好みそうな、男らしい曲を選んできたのは驚いた。

こないだベースラインを弾いたから1曲目は判る。てか、どんだけ自分の女性的な容姿にコンプレックス抱いてんだよ。どんだけ骨太に憧れてるんだ。抱き締めるぞ。

さて材木座よ。

おまえ根本的に違うぞ。それ女性ボーカルじゃねえかよ。

ま、一時期毎週のように聴いていた覚えがあるから曲自体は好きだけれどな。

そして俺は、親父のCDコレクションの中の2曲だ。「ずっと好きだった」はCMで気に入って、「歌うたいの〜」は、単純に昔アコギを持ってた頃練習したから。「歌うたい」って、なんかカッコいいし。

あと海老名さんよ。

持ち寄った曲のリストと俺らの顔を交互に見て妄想を膨らませて、よだれを垂らすのは止めておけ。ここにはいつも鼻血フオローをしてくれるオカン三浦もいないのだから。

「…すごいね。これだけバラバラになるとは」

葉山が困っている。それを見るのはちよつと楽しい。リア充の苦悩はぼっちの幸せ。

「そうだね、どうしようか。はちまん」

今回毛色が違うのは、戸塚だ。もちろん材木座は無視。

多数決で言ってしまうえば日本のロックをやるのが妥当なのだが、あいにく俺は少数派を切り捨てる多数決が嫌いだ。なによりこのバンドは戸塚のバンドだと認識している。戸塚の好きな曲をやらせてあげたい。その笑顔を守りたい。

端で材木將軍なんとか座が喚き出した。

「ぐぬぬ、何故我の案だけ記載して貰えぬのだ。アニメの主題歌にもなっておる名曲ではないか」

哀れみの表情を浮かべながら説明する。しまった、途中から嘲笑になつてた。

「材木座、ボーカルは葉山だぞ。葉山が女性ボーカルの曲を歌ったシーンを想像してみる。」

やなぎなぎは、透明感のある声と詞の描写に特徴を持つアーティスト

トだ。戸塚ならともかく、葉山が歌っても気持ち悪いだけだ。戸塚ならともかく。

「は、葉山くんが女装して可愛い声でヒキタニくと…ぐふ」

誰だ腐女子を運んできたヤツは。それに此処にはヒキタニ君はいませんが何か？

しかし、これではいつまで経っても決まらない。

早く帰りたいし、助け舟を出そうか。

「今度集まるときまでに各自もう1曲選んで、今日のを合わせた計3曲を持ち寄って実際聴いてみようぜ。あ、材木座の2曲は却下な。女の曲だし。」

「そうだね、じゃあそういうことにしよう。次回はぼくの家にしよう。曲を聴きながら話し合うならそのほうがいい。」

「つ、ついに葉山くんがヒキタニ君を家に招待…キマシタワ〜！」

おまえ、もう男子の前でもその腐った性癖隠さないのな。ある意味潔いな。腐潔だな。

そういえば、女子達の曲目は決まっただろうか。

☆

☆

☆

5 女子集えばどうしても恋バナに花が咲く

5 女子集えばどうしても恋バナに花が咲く

雪ノ下雪乃 Side

放課後の奉仕部部室。

由比ヶ浜さんを始め、今回のバンドの面々が集まっていた。

「せっかく女の子だけのバンドだからさ、やっぱ女の子だけのバンドの曲がいいかな」

由比ヶ浜さんの提案から始まった会合だけれど。

「じゃあ、由比ヶ浜はどんなバンドがいいんだ?」

川崎さんが率先して話し合いを仕切る。意外だわ。

「やっぱ好きなのはラブソングかなあ」

あれ、今の質問はどんなバンドが良いか、よね。どんな曲が良いかではない筈よね。

「いやいや、どんなバンドかなんだけど。質問の意味わかってる?」

代わりに川崎さんが突っ込んでくれるから助かるわ。

「むく、そのくらいわかるもん。だから、ラブソングやってそうなバンドなのっ」

赤面して頬を膨らましている由比ヶ浜さん。彼女の表情筋が感情豊かに動くのは、あのよく膨らむ頬の弾力も影響しているのかしら。

「はいはい、じゃあ雪ノ下はどんなのがいいと思う?」

川崎さんは、こういう場を仕切るのが本当に上手い。出席者全員に均等に話を振っているし、少々無愛想だけれどちゃんと受け答えしている。やはり弟さん妹さんたちのお世話を、しっかり者のお姉さんなんだわ。彼女への認識を改めなければ。

「私は、不特定多数の人々の前で演奏するのなら、わかりやすい曲が良いと思うわ。端的に言えば、短調よりも長調、あとはわかりにくい転調をしない曲ね。」

「…あのな、もうちょっと不特定多数にも解り易い言葉で説明してくれよ」

「あら、これは中学校の音楽の授業で教える基本…」

熱弁を振るいかけた私を、教師であり最年長者である平塚先生が窘める。

「あー、雪ノ下。具体的な曲を挙げてみてくれないか」

ずっと無言で成り行きを見ていた平塚先生の発言に私は少しだけ困窮する。あくまでほんの少しだけけれど。

「え、と、…」

困ったわ。二の句が告げない。

「例えばなんですけど、先生の年代ってどんな曲を聴くんですか？」

一色さんの空気を読まない質問に、図らずも救われた形になってしまった。

「私か？ 私は、そうだな。昔はユーロビートにはまったな。峠を攻めるときに聴くと気持ちいいんだよ、これが。スーパーユーロビートとか知ってるか？」

国語の先生なのに、『峠を攻める』という日本語はおかしいことに気がつかないのかしら。『攻める』という語句を使用する際の主な対象は『敵』であるのに。峠を敵に見立てた比喻表現なのかしら。それに年代差が痛々しいわ、先生。

「先生、カビが生えたような武勇伝は結構なんで、曲をあげてくださいよ」

意外と辛辣ね川崎さん。私でさえ口にするのを憚ったのに。ほら先生が落ち込んでしまったわ。

涙目の平塚先生をぼんやりと見てみると、不意に由比ヶ浜さんの視線が私を捉える。

「ゆきのんは…好きな人にどんな曲を聴かせたい？」

一斉に皆の視線が集まる。

そんなこと、言える訳ないじゃない。彼の音楽的趣向も知らないのだから。でも答えられないのも癪だわ。こういう場合はどうしたら…

「す、好きな人なんて…解らないわ」

結果、口籠ってしまった。

由比ヶ浜さん、じとつとした目で見るのはやめてちょうだい。一色

さんも先生も、にやにやしないで欲しいわ。

「あたしはヒ…好きな人には、好きっていう想いが伝わる曲を聴いて欲しい、なあ」

今『ヒ』って言ったわね。本当は何と言いたかったのかを出席者全員が気づいていることに気づかないのかしら。

「あたしはあ、先輩にはラブラブな曲を贈りたいですね〜」

いかにも乙女、といわんばかりのはにかんだ仕草で一色さんは言う。

「…一色さん、あなたは比企谷くんの音楽の趣向を知っているの？」

思わず問い質すような口調になってしまった。しかしそれを歯牙にもかけない一色さん。

「あれえ？ あたし、比企谷先輩なんて一言も言っていないですよ。」

え？

「あーあ、ゆきのんが一番最初にヒツキーの名前出しちゃったね」

え??

「そーかそーか雪ノ下、おまえ比企谷を…」

ええ??

みんなして、にやにやしながら私を見ている。ぼつが悪い、いいえ針の筵（むしろ）とはこの状態。

何かしら、すつごく悔しいわ。まんまと一色さんの罠にはまるなんて。

「…あたし、『愛してるぜ』って言われたのに」

ぼそつと洩らした今の呟き、聞き捨てならないわ川崎さん。

「ま、いいじゃん。ここにいるみんな全員、ヒツキーのこと好きなんだし」

開き直った。バ…由比ヶ浜さんって強いわ。

「ば、馬鹿をいうな。私は教職にある身で、そんな、特定の生徒と…なんて」

「あたしだって、下の兄弟が同級生ってだけだし、予備校だって…たまにたま同じなだけだし」

「…あたしはあ、比企谷先輩に何度か告白されましたけどね」

一斉に視線を、いや殺気めいたものを向けられても動じない一色さんって、強いわ。ただ、今の発言だけは否定しておく必要があるわね。「一色さん、それはあなたの勘違い、いいえ思い込みよ。あなたが勝手に比企谷くんを振っているだけでしよう。だいたい比企谷くんはあなたと関わるのをあまり快く思っていない筈よ」

あまり、と付け加えたのは、確固たる自信が無いから。「そ、そうだよ。ヒッキーはいろはちゃんなんかには渡せないんだからっ」

主旨がかなりズレてきているわ由比ヶ浜さん。賛同はするけれど。「ふう、どうして比企谷みたいなヤツがこんなにモテるのかね、まったく」

それは私も不思議だった。私の気持ち云々は置いておいて。「せんぱい、優しいんですよ。頼み事すると、嫌な顔ひとつだけで結局やってくれるし」

一色さんだったら、比企谷くんを一体なんだと思っているのかしら。生徒会の備品でも思っているのかしら。

嫌な顔はする、というのは比企谷らしいな」

結局この日の話し合いは、比企谷くんの話で終始してしまった。

「比企谷くんに…聴いて欲しい曲、か」

帰宅早々、私は小町さんへ電話をかけて比企谷くんの音楽の趣向を聞いてみた。

「おにいちゃんはですね、よくお父さんのCDを聴いてましたよ。昔のバンドとか男性のJ-POPとか、古い曲ばかり聴いている時期がありましたね。」

小町さん。教えてくれるのは有り難いんだけど、電話口でも解るニヤニヤ顔は遠慮して貰いたいわ。彼の可愛い妹さんだからあまり強く言えないけれど。

とにかく。小町さんの話を基に曲を考えてみることにする。

「古い曲はさすがに知らないわ。男性の曲は論外だし」

誰かのために選ぶのって、大変だし苦手だわ。やはり相談するほうが早いわね。

勉強の邪魔かしらと思いつつ、由比ヶ浜さんへ電話をかけてみる。
「やっはろ、ゆきのん♪」
彼女は3コールで電話に出てくれた。

6 由比ヶ浜結衣は決意する

6 由比ヶ浜結衣は決意する

由比ヶ浜結衣 Side

ドキドキしながらゆきのんとの電話を終えた後、あたしは考えた。「どんな曲がいいかなあ。やっぱ、みんながわかりやすいのがいいよね」

わかりやすい曲っていうと、ドラマとかCMの曲かな。

「あと、伝わりやすい曲、かあ…」

伝える。誰に。何を。なぜ。

「ヒッキー…」

ヒッキーのことを想う時間。

それが今のあたしを支えている。

受験勉強の合間や、通学の途中、買い物の店内。いろんな場面でヒッキーを想う。

想うたびに気持ちは大きくなる。

入学式の朝。あたしのサブレを助けてくれたヒッキー。

一年の時は、全く話が出来なかったな。

二年で同じクラスになれて、奉仕部に入っているのを知って、なんとか口実を作って相談しに行つて。

それからは同じ奉仕部の部員として、あんまり喋らないけどクラスメイトとして、ずっと見ていた。

ヒッキーって、ぼっちのくせに、あんな腐った目をしてるくせに、意外とモテるんだ。

それに気づかないヒッキーがまた可愛らしくて、ちよつと嫉妬して、ついつい過剰なスキンシップを取っちゃって、ビッチなんて言われて…寂しくなつて。

それでも優しくして、ときどきものすごくカッコよくって。

でも、人のために自分を傷つけて。

ヒッキーの中の人間関係は、基本は『ヒッキー自身と、その他』なんだろうな。

もちろん妹の小町ちゃんは大切にしてるし。その溺愛振りにはたまに引くけど。

基本的に優しい人だから、みんなを救おうとするんだ。たとえその為に自分が傷つくとわかっていても。

二年生の：去年の文化祭の時もそうだった。

立候補で実行委員長になった相模南：さがみん。

自分の思うようにいかなくて逃げ出したさがみんを探し出してステージに戻したのは彼。

時間が無い中、怒りの矛先を自分に向けさせて、さがみんを動かした彼。

その後、さがみんの友達がヒツキーを悪く言っていたときは本当にムカついた。

でも文句を言ってやろうとするとヒツキーは止めるの。余計なことするなって。

すごく悲しかった。

ゆきのんだって悲しがつてた。

ゆきのん。

あたしに出来た、本物の友達。少なくともあたしはそう思ってる。歯に衣着せぬ物言い、最初はムカついたこともある。

でも、そういうことを言う時は、決まってあたしのために言ってくれていたんだ。

それに気づいてから、ゆきのんが好きで好きでたまらなくなつて。あたしもゆきのんに言いたいこととか言えるようになってきた時、ゆきのんの態度が変わつたんだ。

態度が変わつたっていうとアレだけど、もっともつと距離が近くなつた、気がした。

あたしを頼りにしてくれるときもあった。すごく嬉しかった。でも、気づいた。

ううん、最初から気づいてた。

ゆきのんも、ヒツキーが好きなんだって。やっとな出来た本物の友達が、恋敵。

仕方ないよね。

ヒツキーの良い所、悪い所、強い所、弱い所、ダメな所、そしてカッコいい所。

奉仕部の中で、全部を同じように見てきたんだもんね。

何度も抜け駆けしようとしたんだ。

でも、一步踏み出す直前で、ゆきのんのが、三人で過ごす部室が頭をよぎる。

だから、最後まで踏み込めなかった。

ヒツキーが鈍感で、そのくせガードだけは固いせいもあるけど。ちがう。

全部、言い訳。

だってこわいもん。

振られるのも、壊れるのも。

ヒツキーがこの先、ゆきのんかあたしの、どっちを選んでくれるかわからない。

もしかしたら、どっちも選ばれないのかもしれない。

だってヒツキーは、親しい人を傷つけることを極端に嫌うから。

どちらかを選べば、どちらかが傷つくのだから。

彼も、臆病だから。

でも、後悔はしたくないんだ。

だから、あたしは。

ゆきのんに。

雪ノ下雪乃に、宣戦布告をしたんだ。

7 雪ノ下雪乃は回顧する

7 雪ノ下雪乃は回顧する

雪ノ下雪乃Side

由比ヶ浜さんとの通話を終えて小一時間。

とりあえず参考書を広げた私は、何も手につかなかった。

「まさか…由比ヶ浜さんがあんな事を言い出すなんて」

一時間前。

私、雪ノ下雪乃は…由比ヶ浜結衣に宣戦布告された。

私達奉仕部の中で、一番「和」を重んじている由比ヶ浜さん。

その彼女が、言い放った言葉。

『そろそろ決着をつけようよ、ゆきのん』

その言葉が、意思が、今も耳に残響している。

彼女の中で私が彼を好きなことが確定事項というのは、少々腑に落ちないのだけれど。

でも、事実だから仕方が無い。隠し遂せなかったのは悔しいけれど。

私は確かに「彼」を愛している。

これは、何度も自問自答を繰り返して導き出された、揺るぎ無い私の真実。

けれど、戸惑っているのも、また事実。

私は、人を好きになったことが無かった。

今までは、誰もが上辺だけで関係を結び、その薄っぺらな関係を保とうとして嘘を塗り重ねているのが見え透いてしまって、人を遮断していた。

ひとりでいると「寂しそう」と言われ、友達がいないとわかると蔑んでくる。

そして、勝てないと解ると排除しようとする。

その繰り返しにうんざりしていた。

そんな中だったわ、彼を知ったのは。

彼は、私の目の前で我が身を挺して車に轢かれそうな犬を救って見

せた。

そこには、打算や欺瞞の存在しない、彼の純粋な行動だけがあった。結果的に彼を轢いてしまったのが家の車だったのが心苦しいけれど。

その彼が、平塚先生に連れられて奉仕部に来た時は本当に驚いたわ。

その時点では私は彼のことをよく知らなかった。

実際の彼は、捻くれていて、卑屈で、人との接し方が下手でも、純粋で、純真で。

性格も性質も違う筈の私との共通項をたくさん抱えていた。

理由は違えど、私も：ひとりだったから。

あなたはこう思っていたのかしら。

私との共通項なんて、歯牙にもかけないのかしら。

高飛車で、いけ好かない女の戯言とでも思っているのかしら。

彼は、今までの誰とも違った。

私が罵倒しても言葉を返してくれた。

それは新鮮で、すごく嬉しかったのよ。

そして、彼：あなたに惹かれたわ。

仕方ないじゃない。心が躍ってしまったのだから。

自分ではどうしようもないくらいに。

同時に、由比ヶ浜さんとも出会った。

彼女は人の顔色を伺っている人で、正直あまり好きではなかったわ。

けれど彼女も、私の辛辣な言葉を受け止めて、応えてくれる人だった。

そのうち彼女も段々と私に遠慮をしなくなって、時には彼女に怒られる時もあったわ。

そして、彼女の優しさを理解した。強さを知った。

彼女を友達と呼びたい。彼女の友達でありたい。そう思ったわ。

でも、気づいてしまった。

彼女が彼に抱く好意に。

彼はといえれば我関せずで、一人で汚名を被るようなことを平然とした顔でしていた。

そんな彼を見て、寂しくなったわ。

本当は傷ついているのに、切ないのに、強がってしまふ彼。

そして、誰よりも悲鳴を上げている筈の彼の心を垣間見てしまふ。

彼の妹さんは本当に可愛いわ。

小町さんは、いつも甲斐甲斐しく、時には厳しく、彼に甘えたり、叱咤したり。

彼の小町さんに対する異常とも言える愛情は、きつと今まで唯一の理解者だったからね。

これからは、

私は、彼の本物でいたい。

彼には、私の唯一であつて欲しい。

彼に守られたい。

彼を守りたい。

傍らで一緒に過ごしたい。

ずっと。

そして私は、由比ヶ浜さんの宣戦布告を受諾した。

8 兄は妹に、姉は弟に

8 兄は妹に、姉は弟に

葉山邸でのバンド練習というハードな残業を終えて比企谷家に戻る俺。

比企谷家っていうとなんか上流階級みたい。いや葉山邸とかいちやう時点で比企谷家の負けは確定か。

「ただいまー」

一方通行の帰りの挨拶が、無人の暗いリビングに虚しく響く。

あれ、小町いないのかな。塾か。男か。まさか…大志か。

「あんのやろー」

いない敵にムカついても腹は満たされない。仕方が無いので、冷蔵庫を開けて夕食作りに使えそうな材料を引っ張り出す。

野菜、レタスだけかよ。

「え、と。鶏ガラスープの素は…」

棚の中を引っ掻き回す。

「その上の棚だよ、おにいちゃん」

声のほうへ振り向くと、小町がいた。その足元には飼猫のカマクラが巻きついてる。

「ごめんねうちよつと電話してた。でもでも、小町の心はいつもおにいちゃんと一緒にだよ。あ、今の小町的にポイント高いっ♪」

何のポイントかは未だに不明だが、小町が上機嫌なのはいいことだ。うん。

「はいはい、おにいちゃんも一緒だよーっ」と

「むー。今の小町的にはポイント激低〜」

そのうち俺自身が没シユートされそうなので、さっさと話題を変える。

「そういえば、お前はメシ食ったのか？」

「あ、ずーっと電話してたから忘れてた。てへっ」

可愛いのだが何か癪に障るのでスルーすると、小町はむすつとした顔で俺を見る。

「じゃあ、チャーハンでいいか？」
「うん」

チャーハンひとつで機嫌を直してくれる。家族、いや兄妹ならではの事なのかもしれない。

「おにいちゃんっ」

小町が俺の腕に絡みつく。

「愛情たっぷりぷりのチャーハン、お願いねっ」

ああ、任せろ。

冷蔵庫にカニかまがあつたので、カニかまをサキサキして今日はカニチャーハンにした。カニかまだから、ニセかにチャーハンだけど。

「小町」

カチャカチャあむつと、お手製のチャーハンを頬張る小町に目を向けずに話しかける。

「ん〜？」

こくこくと水を飲みながらの生返事。

「文化祭、見に来いよ」

小町のコップの中でこふっという音がした。

「けほっ…おにいちゃんがそんなこと言うなんて、熱でもあるの？」

「熱なんかねえよ、文化祭でバンドやることになっただけだ」

いよいよ目を丸くして俺を見る。

「え、ええ〜っ!？」

俺とバンド。水と油みたいなものだ。そもそもバンドとはリア充の象徴的なものであり、青春の象徴でもある。故に、俺には一番縁遠い存在だった。

「あのね、おにいちゃん知ってる？バンドって一人じゃ出来ないんだよ。メンバーいるの？」

Tなんかレボリューションみたいなパターンもあるだろうが。バンドじゃないけど。

「あ、戸塚と、材、いや中二と…リア充オバケ」

「なあんだ、結衣さんや雪乃さんとじゃないんだ。ところでリア充オバケって誰？」

残念そうに目に光らせた期待を消す小町。

「あいつらはあいつらでバンドやるからな。リア充オバケは葉山だ」
たしかこいつ、葉山に一回会ってるよな。去年の夏休みに。
「へえ、さいですか」

その後は、二人で二セかにチャーハンを無言で食べた。

☆ ☆ ☆

川崎沙希 Side

一方その頃、川崎家。

「大志、あんたドラムやったことあるっていつてたよね？」
今後ろに隠した黒いの、本か？ なんだったんだろ。後で追求して
とっちめよう。

「う、うん。音楽室で遊んでただけだけど。どしたの姉ちゃん」
「ちよつと、教えてくれないかな」

「じゃあこれ、と大志にドラムの教本（古本屋で購入）を借りたのは
いいけど。」

「この教本見れば基本は出来ると思うよ。姉ちゃん人付き合いと恋愛
以外は器用だし」

とりあえず1発大志を殴って自分の部屋に戻る。

「なにになに…スネア？ タム？ ツインバス？ さっぱりわからない
じゃんか」

ドラムって何でこんなにいっぱい太鼓があるんだよ。しかもシン
バルが二枚重ねって意味わかんない。

仕方ない、もう一度大志に聞くしかないね。さつき咄嗟に隠した本
のことも含めて。きつとエッチな本か何かだろう。

ま、大志もそういうお年頃だからね。そんなにきつく怒るつもりは
ないけど。

そういえばあいつは…じよ、女性の身体とか、やっぱ興味…あるの
かな。そういう年頃だし。

た、た、例えば、あたしの…身体、とか。

由比ヶ浜は胸大きいけど、あたしだって負けてないと思う、弾力と
か。あ、でも足の綺麗さは雪ノ下には負けてるかな。

でも前にパンツ見られたし。もう一回見せてとか言われたらどうしよう。やっぱ黒がいいんだよね、あいつ。あの時も黒だったし。そういえばあの下着って、どこにいったんだ。まさかあいつがこっそり…

って、ないない。ある訳ない。何考えてんだろ。今はドラムのことを大志に聞かなきや。

よし、いきなりドアを開けてちよつと大志を脅かしてやろう。

「大志くさつき隠した本……！」

「な、何だよ姉ちゃん」

大志は黒い布を握り締めてこちらを見ている。

「…それ…あたしの下着」

黒のレースを握り締めた大志を、とりあえず殴っておいた。

☆

☆

☆

9 川崎沙希は呼びたがっている

9 川崎沙希は呼びたがっている

放課後の音楽室に入ると、すでに戸塚や葉山、ブタ將軍は集まっていた。

今日はバンドの練習、いや楽器の練習の為に割り当てられた日だ。

「おおー、上手くなってきたな材木座」

こいつは本当に勘が良い。葉山の教え方が上手いのもあるだろうが、初めてドラムに触って一週間で8ビートにスネアやタムなど「おかず」を入れて叩いている。材木座にしとくのが勿体無いくらいだ。

「ぬふふ…八幡よ。そう思うのなら大人しく我に帰順せよ」

「それは無理。やだ。断る。無理」

ドヤ顔から一転、しゅんとするバカ將軍を尻目に、戸塚にちよっかい、もとい話しかける。ちよっかといって猪八戒みたいだな。

「どうだ戸塚」

「なかなかうまくいかないや。久しぶりだし(弦が)太くて硬いから：(指が)痛くなっちゃった」

なんだろうこの色気、非常に艶かしい。まだ高校生だぞ。それ以前に男だぞ。

おい葉山、なぜだめーまで顔を赤らめる。材木座はあとで説教な、さっきのドヤ顔の件も込みで。

「そうだ比企谷。ちよっかと好きなように弾いてみてよ」

アコギを持たされた俺に、葉山は戸塚の余韻を残す赤い顔を向ける。海老名がいなくてよかったと心から思う。いたら今頃は一面血の海だ。鼻血の海。

「好きなようにって、ぼっちにはハードル高いぞ…じゃあ適当に」

ギターのネックにカポタストを挟んで、昔練習した『歌うたいのバラッド』を弾いてみる。カポタストつてのは、任意のフレットの弦6本を全部押さえておく便利アイテムだ。

「おー、思ったより覚えてるもんだな」

「比企谷。それ、弾き語りは出来る？」

ん？ おかしい。

今日の俺は明らかにおかしい。普段ならこんなにホイホイと行動なんかしない。リア充の毒氣に中てられたか。早く小町で解毒したい。すまん戸塚、解毒作用は小町のほうが上なのだよ戸塚。

「ああ、元々弾き語りしたくて覚えたんだ。少しなら歌える、かな」
心の中に戸塚に詫びながら少しだけ歌ってみせる。

「はちまん…カツコいいっ」

やばい、見くびっていた。戸塚の浄化能力。副作用で頬が緩んでしまっぜ。

「へえ、意外といい声してるんだな」

「ぐぬぬ、おのれ八幡」

その結果、ボーカルは葉山と俺で半分ずつ担当することとなってしまった。

☆

☆

☆

学校からの帰り道で、川…沙希と出くわした。

「おう。今帰るか」

川…沙希は俺を見るなり少し顔を背ける。

「…露骨に嫌な顔するなよ。泣くぞ」

「あ、いや…嫌じゃない嫌じゃない、むしろす…、あ、あんたこそ、こんな時間に珍しいね」

「ああ、俺たちも文化祭でバンドやることになって、な」

きよとんとしている。今まで見たことのない川…沙希の顔に少し目を奪われる。

「どうした、ハトが豆鉄砲くらったような可愛い顔して」

「か、か、か、可愛い…」

こいつをからかうのは面白い。普段は厭世感たっぷりのくせに、こういうときの反応がいちいち可愛いのだ。

「は、は、比企谷もバンドやるの？」

赤い顔を向けてくるが、目は斜め下を見ている。

「ああ、戸塚のお願いだからな。そういえばサキサキはドラムだったな」

ついに茹でダコ級の赤ら顔を手にした川：沙希。そう川崎。

「サ、サキサキゆうなっ」

「じゃあ、さーちゃん」

顔を真っ赤にしてぶるぶると震える川崎の反応をたっぷり堪能した俺は、無言で歩を進める。川崎も溜息ひとつ吐いた後、無言で斜め後ろを歩く。

「は、は、比企谷は、どんな曲をやるの？」

さつきからなんだサキサキ。

「まだ曲は選考中だ。ところでおまえ、もしかして『八幡』って呼びたいのか？」

「あ？。そ、そんなこと…馬鹿じゃないの」

鋭く睨んでぷいと視線を反らし、なにやら口の中でぼそぼそ言っている川崎に再び悪戯心が頭を擡げる。

「呼んでいいぞ。呼びたいならな。強制はしないが」

にやりと笑う俺に向かって、これでもかかと云わんばかりの勢いで振り向く。サキサキ首とれちやうぞ。

「いや別に、その…ほ、本当に？」

花が咲いたような笑顔を向ける川崎に少し罪悪感を感じる。

「お、おう。今日だけ、な」

「わ、わかった…はち、まん」

ぐはっ。何これ。破壊力抜群。こんなやりとりを日常で繰り返すリア充恐るべし。

「なんだ、サキサキ」

「さ、サキサキいうなっ。は、八幡の馬鹿」

「悪かった。沙希たちはどんな曲やるんだ？」

うー、と唸って下を向いたまま歩く川崎が、ふと顔を向けて笑う。

「な、名前で呼び合うのって、なんかいいな。な、八幡」

おまえ、「な」の含有量多すぎ。そんなに使ったら明日使う分の「な」が無くなるぞ。

「ああ、そうだな」

それからしばらくは無言で歩いた。

「…ところで相談なんだけどさ、昨日大志があ、あたしの下着で…」
結局、女子バンドの情報は何も聞けなかった。

10 比企谷八幡は思い出す

10 比企谷八幡は思い出す

文化祭二日目の打ち合わせということで、生徒会室に呼び出されていた。

放課後なのに学校に残るって超めんどくさい。あ、そういや部活もそうだった。バンドの練習も同じく。残業なんて大嫌いさっつ。

そんな瑣末なことを考えること数分、雪ノ下たちもやってきた。平塚先生は職員会議で欠席らしい。

通りすがりにアホリーダーこと由比ヶ浜結衣がちらりとこちらを見て、すぐに目を反らす。

あれ〜俺ら敵対関係だっけ。

「えーと、今日わあ、タイムスケジュールの作成とお、パンフレットに載せるバンド名や曲目を提出していただくために、来て貰いましたあ」

生徒会長、突然甘えたような声で議事進行をしないでくれ。見ろ、葉山が苦笑いしてるぞ。あの誰にでも良い顔する葉山がだぞ。

「でわあ、文化祭実行委員長から一言、お願いしまーす」

会長：いや一色、もう一度小学校で「てにをは」の使い方を学んでこい。話はそれからだ。

「文実委員長を任せられました二年の鶴巻といます。今回、先輩方には受験勉強でお忙しい中、バンド演奏でのご参加を頂き、本当にありがとうございます」

お、今年の実行委員長は仕事出来そうなやつで良かった。去年は散々だったから。でもそれが相模オリジナル。

「…で、今回は有志参加のバンドも含めて、『総武高ライブ』という形でやって行きたいんです」

説明もわかりやすい。聞く全員が同じように正確に理解できる、勘違いの余地の無い説明だ。

「とりあえずこちらで作成した当日の仮のタイムスケジュールです」

回されてきたプリントには、当日の時間割がぎっくりと、しかし明

際簡潔に書かれている。あとはバンド名や出演順序を記入するだけにしてあった。

「一つのバンドあたり、およそ30分か。結構長いな」

葉山が言う。ライブハウスなどで複数のバンドが出る場合、15〜20分くらいの持ち時間が通常らしい。

「30分…1曲5分ちよいとして、やっぱ5曲くらい欲しいか」

「そうだね。ぼくたちの場合はMCなんかは入れないほうが良いだろうからね」

そうだな、この中で公衆の面前で堂々と喋れるのは葉山くらいだ。「では双方の代表者さん、チラシやパンフに載せるバンド名を教えてください」

「もうっ、まじめに考えてよっ」

「あはは、悪い悪い」

などと戸塚といちやつこうとする俺に、女子バンドのメンバー達から冷たい視線が集まる。全然密談になっっていなかった。痛い視線のお返しとばかりに、女子バンドに矛先を向けてやる。

「どうする戸塚」

「はちまんは、どんな名前がいい？」

「彩加と下僕たち、だな」

「もうっ、まじめに考えてよっ」

「あはは、悪い悪い」

などと戸塚といちやつこうとする俺に、女子バンドのメンバー達から冷たい視線が集まる。全然密談になっっていなかった。痛い視線のお返しとばかりに、女子バンドに矛先を向けてやる。

「女子のほうはもう決まってるのかよ」

先に女子のバンド名を発表してもらって、その隙に決めちゃおう大作戦だ。

「え、ええ…一応」

雪ノ下が顔を赤らめる。よくみると女子バンド全員俯いている。

「じゃあそつちを先に発表してくれ」

女子一同の顔が一樣に赤くなる。何？ 集団感染？ そんなに恥ずかしいバンド名なの？

「あ、あの一、せんぱい」

議事進行の一色が手を挙げる。おまえも顔赤いぞ。感染者か。院

内、いや委員内感染か。あんま上手くなかった。

「あの、せっかくですからあ、バンド名は当日発表のサプライズってことにしませんか？」

何それ、なんか意味あるの？

「それ誰に対してのサプライズなんだよ。まあ、いいけど」

とりあえず会議なんて、早く終わらせたかった。

「では、バンドの責任者さんは後でバンド名を届け出てくださいね。それから、どうせなら曲目も当日発表にします？」

一色が女子メンバーにだけ向けるように提案する。何の出来レースだ。女子メンバーの一色さん。

「そうね。その方が驚きが増しそうだし」

女子側で何か客を盛り上げる策でもあるのだろう。雪ノ下が同意したことで、他の出席者も賛同した。その後出演順を決め、結局打ち合わせは15分程度で終わった。

退室前に一色に声をかける。

「今年の委員長は出来るやつみたいだな。安心した」

去年の嫌な思い出が一瞬フラッシュバックで甦る。

「はいー、去年の相模先輩とは比べ物にならないですよ」

「おい。現委員長を誉めるのはいいが無為に他人を下げるのはよせ。相模もそれなりに頑張っていたんだ」

本当の事だ。相模も相模なりに頑張ろうとしていた。優秀過ぎる雪ノ下を目の当たりにして心が折れるまでは、だが。

「委員長の鶴巻です。比企谷先輩のお噂は一色会長から度々伺ってます。あらためてよろしく申し上げます」

この委員長、流れに逆らわずに物事をより良い方向に持っていくスキルを持っているな。それに可愛い。

「あ、ありがとうございます」

「せんぱあい、また考えたことを口に出してましたよ。可愛いとか」

ぼっち生活が長かったせいか、たまに思ったことが独り言として声に出る。仕方ない。話し相手は自分か小町しかいなかったのだから、とセルフフオロー。

「え、ああ。悪い」

俯いている委員長女史に軽く詫げる。腐った目で気持ち悪いこと言ってすまない、という意味を込めて。

「もう、そういうところ気をつけたほうがいいですよ。先輩の言葉って変に女心をくすぐるんだから」

女心。くすぐれるものならくすぐりまくってみたい。あと戸塚心も蹂躪したい。

「一色会長と比企谷先輩って、仲良いんですね」

それにしても一色のヤツ、しっかりと生徒会長してるんだな。感心感心。

「い、いやいやそれは無いよマキちゃん。それにこの人」

耳打ちをしながら俺をチラチラ見るなよ。ちよつと勘違いしちゃうぞ。

「へ…：そうなんです、か」

足元から舐めるように俺を見る委員長は、全身を見終えるときりにふむふむと頷く。

「ほら、おまえのせいで俺が変な目で見られてるじゃないかよ。どうせ捻くれ者のぼつちとか言ったんだろ。」

すつと鶴巻が俺の目を覗き込む。気恥ずかしくなって目を逸らす。

「一色会長のおっしゃる事、わかる気がします。…ライバル多そうですな」

女の密談に首を突っ込むとロクな事が無い。それは由比ヶ浜と雪ノ下で経験済みだ。

こんなときは早めに退散するに限る。

「じゃあな一色、俺行くわ。バンド名は明日提出する。あ、鶴巻さんだっけ、頑張ってたな」

遠くで戸塚が呼んでいる。ダッシュで向かわなければつ。

11 葉山隼人は見せつける

11 葉山隼人は見せつける

放課後、葉山の家にはバンドのメンバーが集まっていた。

案内されたシアタールームは20畳ほどだろうか。ドラムセットとキーボードが置かれ、壁際にはベースとギターが何本か立て掛けてあった。隅にはアンプも何台かある。普段からバンドの練習に使っているのだろう。

「うわー、すごいね。ね、はちまん」

「貸しスタジオの料金もバカにならないからね」

何言ってやがる。こないだ入ったスタジオよりも部屋も設備も良いじゃねえか。よく見れば、並べてある楽器もFenderだのGIBSONだのRolandだの、誰でも知っていいような一流がずらり。

向こうにあるのは…Ovationのアコギか。

バンド一式揃ってるじゃねえか。お、あっちにはミキサの卓まである。

ま、金は正直厳しい。毎回貸しスタジオじゃ破産してしまうし、ここは葉山に甘えよう。

「毎日夜八時まででは使わせて貰えるから、短期集中でみっちり練習しよう」

「あー、と。その前にバンド名を決めないか。曲目も決まったことだし」

「そうか、提出の期限って明日だったよね、はちまんっ」

楽器や機材を眺めるときめきがキラキラと零れまくっている戸塚を見る。ショーウィンドウの中のウェディングドレスを見るのと同じ目をしている。いや俺にはそうとしか見えない。

「そうだね。どんな名前にしようか」

「そうさの、我は…」

葉山の問いかけに意気揚々と胸を張って話し始めるバカ將軍に掌

底を食らわせると、げふつと醜く鳴いた。

「おまえはいい。マニアな名前になりそうで怖い。戸塚、何かないか？」

しゅんと沈む材木座を尻目に戸塚に案を出すよう促すが、可愛くモジモジするばかり。

「何にも案がないなら……リーダーの戸塚の名前でいいだろ」

それから、何だかんだ、すったもんだあつて、バンド名が決まった。

『SAI:CA』

「ぼくの名前がバンド名……ちよつと、恥ずかしいな」

頬を真っ赤に染める戸塚に、他の男子全員が息を呑んだ。どこかが間違っている。

「よし、やっぱりLOVE SAI:CAに変えよう」

からかうように言うのと、戸塚の顔の赤みはさらに増した。材木座の鼻息も荒くなったが触れずに捨て置く。

戸塚がリーダーで良かったと思う。戸塚がいなければ、俺と葉山は反りが合わず、材木座も孤立しただろう。ていうか、そもそももの言いだしっぺは戸塚だっけ。

「さあ、とりあえず一曲練習しよう」

一時間ほど練習したあと、小休憩を取る事にした。

久しぶりのギターは指先が痛い。しかしまあ、本番までには少しは指先の皮も厚くなるだろう。あとテレキャスは重い。肩、腰が痛い。インドメタシンとかロキソニンが恋しい。

独り考えていると、葉山が飲み物を差し出してくる。

「どうだ、最近」

冷やされたMAXコーヒーを受け取る。意外にこいつ出来るな。

「そんな抽象的な質問をするな。答えられん」

缶を掌で弄びながらつつっけんどんに返す。

「じゃあ、ちゃんと聞こう。雪ノ下さんと結衣、どうするつもりだ」

思わず噴きそうになる。いきなり核心を突いてきやがった。やっぱこいつ嫌い。

「葉山らしくない質問だな」

質問には答えない。ただ相手の急所を突く言葉を打ち返す。

「俺らしくない…か。自分らしさって、何なんだろうな」

MAXコーヒートを爽やかに飲んで、葉山は俯く。

「そりゃ、人それぞれ持つてるイメージってのがあるだろ」

一般的な回答でお茶を濁す。お茶じゃなくてマッカンだった。うめえ。

「俺は、その他人から見たイメージに縛られて行動してきた」

品行方正。誰にでも優しく、ヒーローであり続ける。それが葉山に対するイメージだ。

「でも、君を見ていたら…馬鹿馬鹿しくなった」

椅子から足をだらんと投げ出し、背中を丸めて天井を見上げる。

周囲の抱くイメージとはかけ離れた、だらしない葉山が、そこにいた。

「君は、捻くれてはいるが自分の意思で行動出来る。傍目がどう思うかを気にせずに」

「だから、俺も」

不意に向けられた笑顔。海老名さんがいなくて本当によかった。

「君に対してだけは正直でいようと思う」

「それ、聞き方を間違えれば告白だぞ。海老名が喜びそうな」

「ははは、そうかもしれないな」

おい、否定だけはちゃんとしろ。じゃないとボク…。

「安心してくれ、俺にその気は無いよ。ただ、君に対しては本音を見せないと思ってる」

「俺に本音を話したら後悔するぞ」

「大丈夫。君の優しさは知っているつもりだ。だから…まだ選べない」

飲み干したマッカンをぶら下げて、言葉が続ける。

「君は、色んな人に気を遣い過ぎなんだよ」

「お前が言うなよ」

葉山の自嘲めいた、乾いた笑い。

「相変わらず辛辣だね。でも本当にそう思う。だから言わせてくれ。」

俺は…」

葉山が言いたいことは予想がついた。何せ小学校から一緒に、ずっとあいつの近くにいたんだ。

「俺は…雪ノ下雪乃が好き。だった」

予想がついていたことなのに、実際に言葉で聞くと胸にくる。

「本当に過去形なのか？」

そんなことを聞いてどうする、俺。葉山に不戦敗の、俺。

「それは間違いないよ。彼女を助けられなかった時点で、俺の初恋は終わったんだ」

本心だと感じた。そして、解る気がした。

好意を寄せている相手に対して自分の無力さを知ったとき、人は諦める。

「それに、彼女の気持ちは一人にしか向いていない。君はわかっている、だろう？」

葉山の視線が痛い。まるで積年の恨みを込められたような視線だ。

「お前…本当はまだ雪…」

「それ以上は言うなよ。本当の俺は短気なんだ」

初めて見る、葉山の殺気めいた表情に気圧される。

「わかった。とりあえずお前に気を遣う必要は無い、ということだな」

「ああ、その解釈でいいよ」

シアタールームの入口で戸塚が呼んでいる。

「さて、練習再開するか」

12 材木座義輝と比企谷八幡はどこか通じ合う

12 材木座義輝と比企谷八幡はどこか通じ合う
葉山邸スタジオからの帰り道。

夜道で材木座と帰る方向が一緒とか勘弁して欲しい。せつかくな
らラブリー天使戸塚彩加と帰りたい。

そんなでもって寄り道なんかしたりして、人気の無い公園とか。そん
で…えへへ。

「八幡よ、何か悩んでおるのではないか」

俺の幸せいっぱい妄想は、バカなんとか將軍により粉碎された。
「るせー、お前には関係ねーよ」

非常に気分を害された俺は強い口調で答える。こんな口が利ける
のは男子では材木座だけだ。

そんなことより彩加を返せよ。全部妄想だけど。

「八幡よ」

「あ？」

光の速さで強めに即答。しかし材木座は揺るがない。ダイヤモンド
は傷つかない。それは嘘。

つーか八幡よ八幡よって五月蠅い。名前聞かれたらどうするんだ
よ。どうもしないか別に。

「お主も我も、いわゆる『ぼっち』だ。正確にはお主はもう違うのかも
知れんが…」

こいつが俺に対してここまで口幅つたくなるなんて初めて見るか
も。

「何がいいたい」

「つまりだ、我らぼっちとは常に『傍観者』なのだ。外郭から眺め見て
いるからこそ、その物事の本質が見えることもある」

材木座は、変なヤツだしバカだが決して頭は悪くない。バカだが。
「眺める」と「見る」は意味がぶってるし。あ、やっぱ頭も悪いのかな。

でもこいつがこんな物言いをするからには何か理由がある。そう
思わせる奴だ。

「…続けてくれ」

こいつが何を思っているのか、何を考えているのか。聞いてみたかった。

「しかし今の貴様は…ゲフン、当事者の一人だ。三角形の中に組み込まれていては判断しかねることもあるだろう」

ちよつと待て。何の話だ。

こいつは何を語る気なのか。

「無論、貴様が今巻き込まれておる女人二人との問題よ」

おお、いきなり核心を突いてきやがったな。

しかもこいつ調子に乗ってやがる。俺の呼称が「貴様」になったのが証拠だ。後で肩パンチ決定つと。

つーか材木座の目から見ても、俺の置かれてる状況はバレバレなのね。

「我の見立てでは、貴様は決断したくないように見えるのだが」

こんな、俺と同レベルの恋愛（失恋）遍歴しか持たないような奴に言われるのは非常に癪だ。

癪だけど…半分正解だ。

こいつはこいつなりに、俺を気にかけて心配してくれているのだ。現に今も、俺の様子を伺いながら自分なりの考えを伝えようとしている。少々お節介だが、それは素直に有り難いと思った。

「では…俺はどうしたらいいと思う」

俺は、答えの出ない問いを口にした。

「それは貴様が決めることだ。だが…」

ゲフンホヌンとわざとらしい咳払いで言葉を区切って、奴は更に続ける。

「まず貴様自身が後悔しない選択をするべきだと我は思う。それがリア充に転生した者の背負う枷、カルマ、いや務めだ」

言い回しは相変わらず気持ち悪いが至極まともな意見だ。まとも過ぎて面白みが全く無い。

しかし、おそらくはこいつの言うことは正しいのだろう。だが今の俺には後悔をしない選択肢など用意されていない。

「どちらを選んでも後悔しそうなときは？」

やっときましたかその言葉、みたいなしたり顔で俺を見る。ムカつく。

が、恐らくはここから先が、本当に俺に伝えたいことなのだろう。

「…八幡よ。どちらかを選べばもう一方に後悔の念を抱くのは当たり前ではないか。ならばどうするか。その先は言わぬ。貴様はすでに解っておるであろうからな」

立て板に水の如く、一気に吐いた後、ふふん、とばかりに腕を組むその姿は、正直むかつく。

が、しかし。

こいつ、すごいな。

一方を選べば、選べなかつたもう一方に対して後悔の念を抱くし抱かせる恐れがある。そんな当たり前のことがわからなくなっていたことを、こいつは気づかせてくれた。

こういう時、以前の俺ならば迷わず「選択しない」ことを選択していた。だが以前のようなぼっちではいられなくなつて、俺を取り巻く周囲も確実に変化している。そして俺自身も。

ではどうするべきか。

奴のいうとおり、俺の答えは決まっていた。

「一方を選んだ責任として、もう一方も不幸にしない、か」

言葉にするのは簡単だ。でも、方法がわからない。そもそもそんな方法ある訳はない。

「八幡よ…お主は、私の手の届かない存在になつてしまったようだな」
言いたいことを言つてスッキリしたのか、材木座は満足気に笑う。
でも、こいつのおかげで決意を口に出せた。

「ばかやろ、おまえのおかげでスッキリしたよ。サンキュ、愛してるぜ」

こいつ、いいヤツだな。

当事者となつた俺に、傍観者の目から見たことを伝えてくれるなんて、さすが『ぼっち』だ。

一方を選んだことによりもう一方が傷ついてしまうことが決定事

項ならば、傷つけてしまう方に最大限の配慮をすべきだと思う。
でも、それは俺には出来ない。俺がしていいことではない。
俺は再び出口の見当たらない迷路の中で逡巡する。

13 一色いろはと葉山隼人は結託する

13 一色いろはと葉山隼人は結託する

文化祭の本番まであと一週間に迫った。

実際の会場である講堂を使って、流れの確認と練習をする。女子バンドの部分は別の日にやるらしいので、今日は俺たちと有志のバンドが集合した。

タイムスケジュールでは、午前中に雪ノ下陽乃率いるブラスバンド演奏、午後は最初に有志バンドの出演があり、その後に俺たち男子のバンド、最後に女子のバンド、となっている。

「げっ、雪ノ下さんも来るのかよ」

俺と葉山は顔を見合わせて苦笑いを浮かべる。

「あ、今日は来られないようですよ」

文実委員長の鶴巻だ。その後ろに委員だろうか、もう一人の女子がいる。

ほっと胸を撫で下ろしていると、後ろの女子が説明を始めた。最初には有志バンドの演奏を通して行い、それから俺たちのバンドの通しりハーサルと伝えられる。

「さて、先輩方の演奏を拝見しますか」

先輩方の演奏は、善くも悪くもなく無難というか、普通だった。なぜ今ハードロックなのかはすごく気になったが。

いや、ライトハンド奏法とか凄いなだよ。実際は。

俺たちの番が来た。ステージ上で時間を計りながらセッティングをする。

そして演奏開始。

まだ練習中なので至る所で間違えるが、そのまま流して演奏を続ける。演奏が終わると、撤収の時間を計測。ちなみにタイムキーパーは先程説明を受けた女子委員が担当した。

「24分24秒でした。当日はMCとかなさいます?」

葉山のほうを見遣る。この中でステージ上での話が出るのは葉山ぐらいだろう。

「いいや、今のところ演奏だけで行く予定だよ。もしMCがあっても3分程度で収めるよ」

後ろのほうで、材木座が耳につけたイヤホンモニターを取っている。イヤホンモニターにはクリック音が流れていて、奏者はそれを聞きながらドラムのテンポを維持する。こないだの練習から使い始めたスマホ用のアプリだ。

「葉山殿、お主の助言通りにこれでテンポを聞きながら叩くと、若干ではあるが楽だな。むふ」

この口調に漸く慣れてきた葉山が笑って答える。

「材木座君は、もう素人とは呼べないな。今度俺たちのバンドにも参加してよ。ちようどドラムが抜けてしまったんだ」

おお、まさかのリア充の王、リア王からのオファーだぞ。材木座もついにぼっち脱却の道を歩むのか。

「ゴラムゴラム、私の援軍が必要ならいつでも呼ぶが良い。馳せ参じようぞ」

若干引いている葉山を余所に、いつものように胸を張り高笑いを上げる。

「…おい材木座、女子が引くぞ」

正しくは「女子も引くぞ」か。だって男子も引いちやうもん。

決まらない決めポーズを決める材木座を横目にタイムキーパーの女子委員を見遣ると、ケラケラと笑っていた。

「ふう、笑って貰えただけマシか。」

キセキって、あるのな。

☆

☆

☆

翌日、文化祭実行委員会室。

「あれえ葉山先輩、どうしたんですか？」

出迎えたのは、忙しそうに指示を出す生徒会長の一色と、文実委員長の鶴巻。

「今日は相談があつて来たんだ」

「相談なら奉仕部ですよ。比企谷せんぱいとバンド組んでるんですからそちらに…」

「いや、この相談は比企谷には話せないんだ。彼に関係することだから」

きよとんとして顔を見合わせる一色と鶴巻に、葉山は相談と称して用件を伝える。その内容に、一色と鶴巻は興味と同時に難色を示す。

「んー、それって…相談というか、畏。いや、悪戯ですかね」

それが、葉山の相談の内容を聞いた一色の率直な感想だった。

「ああ、そういえるな。だけど、無理を承知でお願いしたい」

鶴巻と一色が顔を見合わせて、ぼそぼそと話し合う。

「わざとトラブルを起こすのは運営側としては気が引けます」

一色の常識的な発言に、うんうんと頷く鶴巻。

「でも面白そうだし、その方が盛り上がっちゃいますね。きつと」

鶴巻の頷きは、驚きの顔に変わっていた。

「か、会長…そんな、文化祭を個人的な理由で…」

取り乱す鶴巻を尻目に、一色は葉山と歪んだ笑顔を交わしている。

「葉山先輩って、意外と腹黒いんですね」

「こうでもしないと、あいつは動かないからね」

ふたつのニヤニヤ顔が向き合うのを、鶴巻の深い溜息が包み込ん

だ。

「もう、どうなっても知りませんからね」

俺は、その話し合いの内容を知らなかった。

14 比企谷八幡は未だ逡巡している

14 比企谷八幡は未だ逡巡している
文化祭初日。

普段とは違う校庭の景色。

校内には参道のように露店が並び、訪れる人々に期待を抱かせる。一歩足を踏み入れると、そこはすでに異世界だ。

俺は、妹の小町と学内を回っていた。小町は今年無事に総武高に合格。めでたく後輩になっていた。奉仕部にはたまに顔を出す程度だけだ。

「ほらおにいちゃん、あれ入ろっ」

小町に引きずられながら入った教室は3年F組。俺のクラスだ。

「うわあ、かわいい〜」

そこは、コスプレ喫茶と化していた。その中で一際目を引く存在。

「あ、ヒッキー、小町ちゃん。やつはろ〜。じゃなくて、いらっしやいませ〜」

こいつ、これを知っててうちのクラスに引っ張り込みやがったな、ねえ小町さん。

「かわいいねっ、結衣さんかわいいねっ」

モジモジするな由比ヶ浜。抱き締めたくなるだろうが。そして捕まるだろうが。

「あー、結衣さんたら。おへそが見えてますよっ、ほらほらおにいちゃんっ」

豊富なバストの下、上下に分かれたコスチュームの間から小さなへそが見え隠れしている。

うわあ、これ欲しい。てかどんな服だよ。セパレートのメイド服って。

「…ヒッキー目がえっちいよ。あんまり見るなし」

ぷいと顔を背けるが、決して露出したへそを隠そうとはしない。

なので思わず目が行ってしまう。そしてその視線はすぐに露見する。

「ヒツキーのえっち。へんたいっ」

小町がニヤニヤしながら俺と由比ヶ浜の顔を交互に覗き込む。

「あれあれ、おにいちゃん顔が赤いですねえ。あ、結衣さんも真っ赤だ」

心臓が跳ねまくって、何を言えばいいか、何をすればいいかが全く解らない。その隙に俺の後ろに回り込んだ小町が黒い笑みを浮かべ。

「えいっ」

俺の背中を思いつきり押した。

ばふ。

「…えっ？」

小町に押されたせいで俺は由比ヶ浜に体当たりをする格好になり、いや正確には由比ヶ浜に抱きとめられていた。天然のクッションつて良いモノですね。ふつかふかだし、良い香りだし。

「ヒ、ヒツキー、近いよ…」

吐息が胸をくすぐる。

「あ、ああ、ゴメン」

すぐに離れて小町を睨む。吹けない口笛を吹いて涼しい顔をしてやがる。

「まあまあおにいちゃん、例のアレだよ。ラッキースケベだよっ」

どこで仕入れたんだよ、そんな言葉。でも柔らかかったし良い匂いもしたから、兄としてあとで少しだけ小町を褒めてあげようと胸に誓う。

「あれ？ 小町はおにいちゃんの願望を叶えてあげただけなんだけだなあ」

「がっが…願望って、ヒツキー…あたしを抱きたいって…こと？」

女子がそんな直接的な言葉を使うんじゃないやありません。すっごくしたいけど。あ、あとで小町を褒めるのナシな。

「はあ…おまえ、やっぱビッチか」

「ビ、ビ、ビ、ビッチって言うな〜！」

俺の数倍は大きな声で「ビッチ」という単語を叫ぶ由比ヶ浜。集まる視線。視線に気づいて真っ赤になる由比ヶ浜。いわゆる赤っ恥。

「あ、あわわ…もう、ヒツキーのばかあ」
俺のせいじゃねえし。あ、発端は俺か。

「わかった悪かった、あとでリング飴買ってやるから」
「ばあつと笑顔が由比ヶ浜に咲いた。リング飴は去年の花火大会で覚えた、対由比ヶ浜用の決戦兵器だ。」

「ほんと？　ありがとヒツキー。あと少しで休憩だから、ね？」
「ほら。これですよ。こうやってすぐ抱きつくからビツチなんて言われるんですよ、ビチヶ浜さん。」

「離れる、クラス中の視線が痛い」
離れたところでキツと睨むのはメイド姿の女豹、いや川…沙希。
また赤くなる由比ヶ浜。

「そんなに赤い顔してリング飴食ったら、まるで共食いだな」
由比ヶ浜の休憩を見計らって再び教室を訪れる。さつき余計なことを言ったせいで抓られた頬がまだ痛い。

「あ、ヒツキー、明日の総武高ライブのチラシ、見た…？」
いつもの見慣れた制服に着替えた由比ヶ浜が、俺の顔をちらちら覗く。

「いや、まだ見てないが、もう配ってるのか」
「み、見てないなら…いい」

「何でこいつは奥歯に物が挟まったような物言いなんだ。」
遠くで、文実の、リハの時にタイムキーパーを担当した女子委員がチラシを配っている。

「おう、一枚もらえないか」
声をかけられた女子委員は、瞬間驚きの顔を見せる。
「あ、比企谷先輩と結衣先輩、お疲れさまです」

「そういつて、手元のチラシと俺の顔を見比べる。」
「ん？どうした？」
「何度もチラシと俺の顔を往復して、首を傾げている。」

「もう、ヒツキー、行こー」
その瞬間、女子委員が放った。

「あー。この『HIKKKEYZ』って、やっぱり比企谷先輩から取った

名前ですよね」

向けられたチラシを見る。確かに書いてある。由比ヶ浜たち女子バンドの名前の欄に『HIKKEYZ』と。

カタカナにすると『ヒツキーズ』。

読みを直訳すると、ヒツキーのもの…だと？

由比ヶ浜に目を遣ると、明らかに様子がおかしい。挙動不審だ。目がバタフライで泳ぎまくっている。手なんか某海浜なんとか高校の生徒会長ばりにキョドリまくっている。

「由比ヶ浜、これはどういうことだ？」

恐らくではあるが、俺はジト目というのを由比ヶ浜に向けていた。

「あ、あー、いや、その…みんな…ヒツキーに助けられたっていうか、フアンっていうか…」

擬音で表すとしたらボンツ！ 自分でも顔が紅潮しているのがわかった。それ見て笑うな女子委員。

「ごめん、いや…だったかな」

「っーか今更だし」

せめてもの抵抗に、由比ヶ浜の頭を掴んで押さえつける。

「ふぎゅ…ごめんね」

申し訳なさそうに頭のお団子を触りながら上目遣いで謝る由比ヶ浜と、未だ顔が熱い俺。それを笑って見ている女子委員。

「先輩って本当にモテるんですね。材木座さんと違って」

何度もいうが、俺はモテてはいない。少なくともその自覚は無い。材木座よりはマシかもしれないが。人として。

「ヒツキー、リンゴ飴〜」

リンゴみたいに真っ赤な顔をした由比ヶ浜に強引に手を引かれ、再び露店を目指す。

そういえば、雪ノ下はどうしているんだろう。

てか小町はどこ行った。

15 比企谷小町は奔走する

15 比企谷小町は奔走する
3年J組。

「雪乃さんっ、遊びにきちやいましたっ」

ぴよこん。そんな効果音が付きそうな動作で小町は雪ノ下の前に立つ。

「あら小町さん、こんにちは。ひ…お兄さんは？」

辺りを見回す雪ノ下に、小町の悪戯心は全開になる。

「あらあら雪乃さんっ、兄のことそんなに気になりますうっ？」
にやりと笑いながら見上げられて、雪ノ下は困惑する。

「い、いえ、そんなことは…その」

そこで小町は、にやけ顔そのままでこう伝えた。

「おにいちゃんはですね、結衣さんと一緒ですよ」

ぴくん。いや、ぴしっ。確かに雪ノ下からそんな音が聞こえた。

「え。ど、ど…、そう」

滅多にお目にかかれない雪ノ下の慌てふためく姿に満足した小町は、平時の口調に戻る。

「まあ、あの小心者のおにいちゃんですから、何かある訳ないですけどね」

「そ、そうね、そういう意味では安心ではあるわね」

安堵して微笑む雪ノ下に、ここでもう一度小町が爆弾を落としかかる。

「あーあ。雪乃さんと結衣さん、二人とも小町のお姉ちゃんになってくれたらいいのに」

が、この爆弾は不発に終わった。

「あら小町さん。私はあなたに妹のように接しているつもりよ。きつと由比ヶ浜さんも。それにけ」

「それに…？ け…？」

機を見るに敏。小町の悪戯心は好機を見逃さない。

「そ。それに…何でもないわ。とにかく小町さんは私の可愛い妹よ」

「ゆ、雪乃さん！ もう小町的にポイント高すぎです〜♪」

『ポイントって、一体何のポイントなのかしら。そろそろ知りたいわ』

「さーてそろそろ結衣さんの休憩時間が終わりますから、おにいちゃん呼びますね〜」

「え、ええ」

☆

☆

☆

程なくして、俺はJ組の教室にいた。

ゴシックというのだろうか。所謂ゴスロリではなく、中世ヨーロッパの雰囲気醸し出すメイド服。その中で別格の気高さを纏う美少女から俺の目は離せない。似合いすぎている。美しすぎるのだ。

その美少女は、俺を見つけるなりにこりと微笑んでいた。目、以外は…であるが。

「いらっしやい、比企谷くん。由比ヶ浜さんとのデートは楽しかったかしら」

開口一番のその言葉を受けて現実へ戻った俺は雪ノ下の横にいる妹、小町を睨む。

「てへへ。」

小町の頭をくしくしと驚掴みにしていると、口角を吊り上げた雪ノ下が俺を目で射抜く。

「あら、何かやましいことでもあるのかしら。それに小町さんは私のお客様よ。いくら肉親とはいえ無礼な態度はやめてもらいたいわ。そもそも…」

「あー、わかったわかった。雪ノ下、喉が渴いてるんだが、紅茶をもらえないか」

3年J組の教室は、紅茶を供する喫茶店になっていた。

「こつ、ここにはあなたに供する紅茶は無…」

もによもによと雪ノ下が話しているのに気づかず言葉が発してしまふ。

「俺も何度か自分で淹れてるが、やっぱりおまえの淹れた紅茶じゃないとダメだわ」

「え」

ぴたりと「もによもによ」が止まり、一瞬にして雪ノ下の顔が朱に染まる。

『おお、おにいちゃんたらいつのまにそんな技術を。雪乃さんのポイント高いよ』

「そ、そう。じゃあ、少し待っていてね」

そそくさと席を立つと、自分のバッグを開けて茶葉の缶を取り出す。その缶は誰が見てもわかる高級品で、他の客に供するものと違うことは紅茶に詳しくない俺でも判った。

「…はい。どうぞ」

「ああ、いただきます」

一口、含む。香りと安らぎが口内に充満する。

「やっぱり美味しい、っーかいつもより美味しいな。ちょうど飲み頃の温度だし」

「そ、そう。それは何よりだわ…」

『あのごみいちゃんが雪乃さんを完全にコントロールしてる…』

小町は、お茶請けのクッキーをボリボリと頬張りながらニヤニヤしていた。

文化祭初日からの帰り道。

「おにいちゃん」

小町がいつになく真剣な表情を向けてくる。

「そろそろ…決断の時だよ」

俺は黙って、さつき自販機で買ったMAXコーヒーを啜る。

「おにいちゃん、人のことだと大胆な行動が出来るくせに自分のことだとまるで優柔不断だから。メニューを選ぶときの小町と一緒」

自嘲気味に呟くと、小町は仄かに赤く色づいた空を見上げる。

「小町の理想はね。結衣さんも雪乃さんも、ずーっと小町のお姉ちゃんदैいて欲しいんだ」

しばらく薄赤い空を仰いで遠い目をして、すつと下を向く。

「でも、それは叶わないって、無理だって…知ってる」

俺のことでこんなにも小さな心を悩ませているのだと思うと、申し

訳ない気持ちになる。

「だ・か・ら、小町のお姉ちゃんは、おにいちゃんが決めてっ」

俺の顔を見上げ、満面の笑みを浮かべる。

「どっちのお姉ちゃんを選んでも小町は大丈夫。選ばれなかった方には小町のお友達でいてくれるようお願いするから」

妹に背中を押される兄。情けないが、そのお節介が今は有り難い。

「ああ、わかった」

「ほんとかなあ〜」

小町と手をつないで帰る。

久しぶりに繋いだその小さな手に、勇気をもらいながら。

16 幕は開け比企谷八幡は

16 比企谷八幡は窮地に立つ

文化祭は二日目に突入し、ついに双方のバンドの対決の日となった。別に対決形式にした覚えは無いがチラシの煽り文句にはそう書いてあった。

有志の卒業生の前座バンド(卒業生の方々すいません)が終わり、先にステージに上がるのは戸塚がリーダーを務める、俺達のバンドだ。「ヒツキー、がんばってっ」

トリを務める女子バンドに舞台袖から見送られ、俺たち四人はステージに立つ。

あ、ドラムは座るのか。

やけにテンションが高いアナウンスが流れ出す。

“次のバンドはこいつらだ

受験勉強そっちのけ

文化祭を楽しみまくる…

ハヤハチ：男子バンドSAI：CAだ！

ん——っ、キマシタワッ”

海老名さん、ふつといマイク握ってなに言ってるの。あんたも楽しんでるよな…鼻血的な意味で。

『SAI：CA』（サイカ）

最初の曲は、戸塚の強い意志で決まった「Walk This Way」

重いギターの音から始まるこの曲は英語の発音が得意な葉山がボーカルを務めた。つかみとしては上々の出来だったと自画自賛。

1曲目を無事終えたことで、全員にほんのりと安堵の表情が浮かぶ。

2曲目は、これまた戸塚の選曲なのだが「悲しみの果て」

この曲は俺も葉山も好きな曲で、実は材木座もこっそり聴いていた曲だった。この曲の詞はどこか文学的で儂く脆く、情緒を感じさせる。

俺としては「ガストロンジャー」や「浮雲男」のほうがよかったのだが、誰も知らないという理由で却下された。

この曲は、俺がボーカルを担当した。すつげー緊張した。3ヶ所声が裏返った。

3曲目は「会心の一撃」

リア充葉山の選曲だ。

誰にでも優しい、優等生の葉山らしい一曲。しかし会場の観客、特に女子を盛り上げるのには効果的だった。無論ボーカルは葉山の担当。

4曲目も葉山が選んだリア充曲「大切なもの」

勿論ボーカルは葉山が担当なのだが、この曲はとにかく勢い、らしい。

つまり俺の一番苦手とするジャンルなのである。

でも確かに盛り上がってるな。特に女子。なんか飛び跳ねてる。

あ、前の奴の頭が邪魔で、葉山が見えないだけか。

意外なことに材木座がいたく気に入ったようで、このバンドの曲は全部ネットで購入したらしい。

ネット購入というところが材木座クオリティ。

そして、いよいよ最後の曲。

今まで比較的練習どおりに演奏できて順調だったのだが、ここでトラブルが起きた。

「困ったな……」

各楽器やマイクの音をまとめる機械、ミキサーが飛んでしまったらしいのだ。

「ああ、代わりのミキサーは音楽室にあるが、到着まで最低5分はかかるらしいんだ」

慌てる裏方達とは対照的な、葉山の落ち着いた、不気味ともいえる態度。実際他のライブでもこういうことは経験しているのだろうか。

そんな場数に勝るはずの葉山の、意外な提案。

「比企谷くん、少々ズルい手を使わせてもらおうよ」

何をする気だ葉山。まさか…

「奉仕部のキミに依頼する。ミキサーが届くまで、この場をつないでくれ」

「おい、それは無茶振りだろ」

断固拒否の俺に、葉山が囁く。

「君の『歌うたいのバラッド』、聴きたいな」

急場しのぎで、ミキサーを通さずにアンプから直接スピーカーに接続。接続してあるのはアコギの音を拾うマイクと、俺の口元にセットされたスタンドマイクだけ。

「ヒツキー…」

舞台の袖で見守る由比ヶ浜、そして雪ノ下。その後ろには双方のバンドの面々。

一瞬その二人だけを見つめると、俺はセットされたマイクの前に立つ。

この曲を人前で歌うのは初めてだ。というか、こんなに大勢の前で弾き語りをする自体、考えたこともない。だいたいバンドだって一杯一杯の状態だったんだ。

足が震える。喉が異様に渴く。きつと口臭もかなり強烈だろう。

舞台に一人で立って、30秒が経った。緊張が半端ない。まだ歌い出せない。

その時。

「ゆきのん」

「ええ、由比ヶ浜さん」

二人の美少女が駆け寄り：俺の両脇に立った。

由比ヶ浜結衣と、雪ノ下雪乃。

二人は、左右から俺に微笑みかける。

「大丈夫だよ、ヒツキーなら…できる。信じてる。ヒツキーの歌、聴かせて」

「そうよ、自信を持ちなさい。どんなに卑屈な歌になろうと、あなたの歌だもの。最後まで聴かせてもらうわ」

若干告白じみた二人の美少女の応援に、会場の観客はざわついてい

る。

「…はあ、おまえら、マイク入ってるぞ」

俺に向けられた二人の声は、俺の目の前のマイクを通して講堂内に響き渡っていた。

一瞬静まった場内が、次第に笑いに包まれる。

顔を赤らめて焦る雪ノ下。由比ヶ浜に至っては真っ赤な顔で訳のわからない動きをしている。

「あ、あなたが早く歌わないからでしょ…もう」

また爆笑。袖で見つめる平塚先生のニヤニヤが止まらない。俺の汗も止まらない。

覚悟を決めて。ひとつ、深呼吸。そして。

「…少し、話を聞いてください」

会場が少し静まる。

とりあえずこいつらのフォローだけはしておかないとな。

俺を挟んで立つ二人は、黙って俺を見つめている。

「この二人は、俺が籍を置く『奉仕部』の…仲間、です。こんな俺がこのような華やかな場に立っているのは、この二人を始め、いろんな方々のせい…いやおかげです」

由比ヶ浜の啜り泣きが聞こえる。

つーか泣くな。感極まるなよ。動揺すんだろ。

「今から歌う曲は、演目には無い曲です。その、機材のトラブルを解消するための場つなぎです。決して上手くはないですが、今まで俺を叱咤してくれ、見守ってくれた方々と、その…二人の為に歌います。聴いてください。」

二人を見る。反応を見たいわけじゃなく、俺自身が安心したいから。

「あ、お前ら二人はそこで聴け。一緒に恥をかけ。もう俺をぼっちにするなよ」

『歌うたいのバラッド』

カポタストをギターのフレットに装着し、Cのコードの押え方で6弦から順に鳴らす。

緊張と熱で、汗がギターの胴に滴る。

照明が暗くなり、スポットライトが俺と、雪ノ下、由比ヶ浜を照らし出す。

ちなみにこんな演出、俺は望んでないぞ。

数箇所間違えてしまったギターに乗せた俺の卑屈な歌声が終わると、場内から静かな拍手が起こった。

演奏を終え、深く息を吐く。

我に返って両横を見ると、由比ヶ浜は目を潤ませて抱きついてくる。

「お、おい、時と場所を…」

観客から歓声と冷やかしが巻き起こる。戸部のテンション高めの声がやけにイラつく。

雪ノ下はというと額に手を充てて溜息を零し、その後柔和な、なんとも美しい笑顔をくれた。

後で聞いた話だが、機材のトラブルは葉山が仕組んだことだった。後でグーパン決定。やっぱり勝てそうもないからやめとこう。

機材を交換し、そして俺達の、本当の最後の曲。

『ずっと好きだった』

ボーカルは俺が務める。ストレートなロックの曲調に乗せて淡い過去の恋愛を歌った曲。

いつかこの曲のように、俺も過去を淡い思い出にすり替えられるのだろうか。

トラブルのせいで少しタイムオーバーしてしまったが…何とか盛り上がって、俺たちの即席バンドの幕は降りた。

17 想いは遙か彼方へ

17 想いは遙か彼方へ

“ 名前の由来は好きな人

ヒキタニくんてばマジすげえ!

三年 二年に 先生も

恋の火花を散らしちゃう

女子バンド、HIKKKEYZ!

”

その声、戸部か。マジ勘弁してくれよ。俺の個人情報だだ漏れじやんかよ…あと恥ずかし過ぎるからやめて。リングアナ風にヒツキーズとか叫ばないで。

「総武高ライブ」のトリは、女子だけで構成されたバンド『HIKKKEYZ』（ヒツキーズ）。

なぜこんなバンド名にしゃがった。しかもスペル微妙だし。由比ヶ浜クオリティかよ。

先程ステージ上で由比ヶ浜に「ヒツキー」とマイクを通して言われた今、女子バンドの名前を叫ばれる恥ずかしさは青天井である。

俺には彼女たちの演奏を見届ける義務があると平塚先生はいう。俺は、そんな義務とか関係無しに彼女達の勇姿を、晴れ姿を脳裏に焼きつけるつもりでいた。

『HIKKKEYZ』（ヒツキーズ）

一曲目は「Transistor Glamour」

1990年発表の、ノリの良い楽曲。このユニットはこのシングルしかリリースしていないのが非常に残念だ。

つーかよくこんな古い曲知ってたな。ああ、平塚先生の選曲か。なら納得。

川崎が叩き出すリズムマシンのような軽快なドラムと、リフを繰り返す雪ノ下のギター。そこに由比ヶ浜の表情豊かな歌声が上乘せられると、心地好い音となって会場に響く。

2曲目は「OVER DRIVE」

ギターのイントロから始まるこの曲は、なんかの飲料のCMでも使

われた曲。

明るい曲調と、何故か物悲しさを感じさせる歌詞。

ぼっちだった俺には体験し得なかった青春が詰まった、心地よい楽曲。

原曲も雰囲気があったが、この曲を歌う由比ヶ浜からはそれとは異質の艶っぽさを感じてしまった。

3曲目は、「ラブソングはとまらないよ」

女の子の気持ちをストレートにかつ繊細に歌った曲。これも某飲料のCMソングでもある。

4曲目も同じバンドの「センチメンタル・ボーイフレンド」

優しい音と軽いリズムに、女の子の気持ちを乗せた曲。

3曲目、4曲目は由比ヶ浜の強い希望らしいが、いかにもあいつらしい。思い返せば由比ヶ浜はいつだって一生懸命だ。その真っ直ぐな歌声は胸に仄かな痛みを感じさせる。

最後の曲の順番になると、一色、川崎、そして平塚先生は楽器を置いて袖に戻ってきてしまう。

舞台には弾き手を失った楽器たちと、由比ヶ浜結衣と、キーボードの前に座り直す雪ノ下雪乃。その残された二人だけを浮かび上げさせるように照明も変わる。

その曲が始まる前、俺はステージの隅に立つ平塚先生に手招きされる。

え、ステージに来ていつていつてるの？ 俺、女子じゃないよ？

中々動かない俺に痺れを切らせたのか、つかつかと歩いてきて俺の手を、いや俺を身体ごと引きずるようにステージへ出させる。もういい加減ヒッキーコールはやめて欲しい。

「…ヒッキー。聴いててね。あたしの、あたしたちの想いを」

おまえ、なに公衆の面前で恥ずかしいこと言っちゃってるの？ てか雪ノ下さんも止めなさいよ。

「しっかりと…胸に刻みなさい。私を、私達のあなたへの想いを」

雪ノ下の言葉のほうが、直接的だとは思ってもよらなかった。

気持ち的には公開処刑だ。しかも裁判無し。独裁国家かよ。

てかおまえら、そういうことはマイク切つて言えよ。またヒツキーコールが来ちゃうじゃないの。

雪ノ下雪乃 (Piano) & 由比ヶ浜結衣 (Vo)

「月とあたしと冷蔵庫」

ちなみにこの曲の歌詞は恋愛を歌ったものではない。

ふとした日常の中で、自分の心情を独白するような歌詞だ。

綴るような雪ノ下の繊細なピアノと、語りかけるような由比ヶ浜の優しい歌声。

こいつらが居てくれたから、俺はここまで変わってしまった。いや、変わった。

ぼつちを尊重し、罵倒しながらも共有してくれた雪ノ下雪乃。

ぼつちの壁を、溝を、無くそうとしてくれた由比ヶ浜結衣。

どちらが欠けていても、俺は今の俺ではなかった。

演目にある全ての演奏が終わる。由比ヶ浜は一礼をしてステージの前へ行く。

が、雪ノ下はピアノから離れない。

「会場の皆さん、わがままを聞いてください。もう1曲だけ、お付き合いください」

由比ヶ浜がボーカルマイクを通して観客に申し出る。

「この曲は、ゆきのん：雪ノ下雪乃さんと、あたし：由比ヶ浜結衣の気持ち、大好きな人への気持ちを込めた曲です。でも…」

会場がざわめく。ヒツキーとか叫ぶなよ会場。

ん？ 今叫んだ奴、あれ戸部か？ なんだ腐女子連れかよ。よかつたな。

「ゆきのん、やっぱりここは…ゆきのんに任せる」

驚きの顔を由比ヶ浜に向ける雪ノ下。

「だって、ヒツキーも一人で歌ってくれたんだよ」

だから…またそういうことを。マイクを通して。ほらみろ、場内からヒツキーコールが聞こえちゃってるじゃないかよ。俺まだ舞台の隅っこにいるんだからね。いやスポット当てるなよ照明さん。

「あたしの気持ち、ゆきのんに預けたからね。ヒツキー。ちゃんと聴

いててね」

雪ノ下と目が合う。時間にして五秒ほど。長く、短く、切ない五秒。「…由比ヶ浜さん、あなたって人は」

赤鬼のような表情の雪ノ下を尻目に、由比ヶ浜はニコニコしている。

「…はあ、仕方ないわね。聴いてください…」『糸』

『糸』 雪ノ下雪乃 (Piano & Vo)

それは、雪ノ下自身がアレンジをしたであろう、叙情溢れるイントロから始まった。

多くのアーティストがカバーしているこの曲。原曲は俺たちが生まれる遥か前に生まれた。

縦糸を愛しい人、横糸を自分、そして織物を人生に喩えた曲。

この歌詞の中では「仕合せ」という言葉を使っている。

「幸せ」ではなく「仕合せ」。

出会ったことが善いことなのか否か。それは誰にもわからない。

それを決められるのは出会った当人だけなのだ。

その人を思っただけが善いことか否か。それは誰にもわからない。

答えは、遥か未来にしか無いのだ。

人を思う事は簡単なものかもしれない。難しいのは人を思っただけで行動することだ。

だからこそ人は悩み、苦しむ。

現在の俺たちのように。

18 彼ら彼女らの舞台は仮初の終焉を見る

18 彼ら彼女らの舞台は仮初の終焉を見る
雪ノ下雪乃。

万能。完璧。冷徹。彼女を形容する言葉だ。
だがステージでピアノを弾きながら歌う彼女の姿はどれにも当てはまらない。

柔らかな歌声は心への浸透圧を持ち、そのピアノの音色は丁寧で、臆病で、どこか儂い。

そこにいるのは、どんな言葉にも形容しがたい、ただの等身大の少女だった。

雪ノ下のピアノの弾き語りが終わると、会場に水を打ったように静寂が訪れる。

まるでピアノの演奏会やクラシックのコンサートのような感覚。
そして。

一気に巻き起こる大歓声。

客席を見ると、立ち上がった人の群れの中で涙を拭うような仕草や、泣きながら拍手をする女子の姿が見える。

それ程までに雪ノ下雪乃の演奏、歌声は素晴らしかった。
ステージ上では、『HIKKEYZ』（ヒツキーズ）のメンバー全員が再び立ち、一列に並んで挨拶をしている。

そして再び大歓声。

ステージ袖に避難していた俺の前に、雪ノ下が立つ。

「聴いて…くれたかしら」

感情を抑えて言葉少なに答える。

「ああ、昔の歌だったな」

「ヒツキー、もっとゆきのんを誉めてよ」

由比ヶ浜も雪ノ下と並ぶように歩み寄る。

「いいのよ由比ヶ浜さん」

「なんで、ゆきのんあんなに頑張ったじゃん。ほらヒツキー…ヒツキー？」

俺の方を見て、由比ヶ浜は言葉を止めた。

「ほら、ね」

自分の頬に手を充てる。濡れていた。

「お、俺…」

気がつかなかった。涙が流れていた。

世代ではない俺は、この曲に特別な思い入れなどない。

しかし、雪ノ下雪乃の演奏、歌声、そしてその歌に込められた二人の、二人分の想いが、俺を泣かせていた。

そう自慢げに語ったのは打ち上げ後の小町だったが。

「せんぱーい、何泣いてるんですか気持ち悪いです勘弁してください
ごめんなさい」

一色が茶化すように言い、俺はまた振られる。

「ぐぬぬ八幡！ なぜお主ばかり…ぐううっ！」

材木座が意味不明なことを叫ぶのはスルーするとして。

「ところで由比ヶ浜さん」

さて、油断していた由比ヶ浜に対する雪ノ下さんによる追求が始まる。

「なぜあなたは最後の曲を歌わなかったのかしら」

いつもなら恐怖に顔を引きつらせる由比ヶ浜だが、今日は違う。

「だって、泣いちゃいそうだったんだもん。それに」

少し俯いて、しっかりと雪ノ下の目を見て告げる。

「あの曲は、ゆきのん一人で歌うべきだと、そう思ったの」

優しい笑みを雪ノ下に向けた由比ヶ浜はすつと振り返り、俺に笑顔の照準を合わせる。

「ヒッキー。ゆきのんと上手くいかなかったら、あたしと付き合っ
ね。あたしが幸せにしたげる」

「由比ヶ浜さん…」

「由比ヶ浜…」

「なあに、ヒッキー？」

フフンと、してやった感満載の由比ヶ浜に、雪ノ下の溜息と俺の溜息がハモる。

「おまえ、みんながいるこの状況でよくそんなことを言えたな」

「え、あ、あ…」

きよろきよろして途端にオロオロしだすが、もう遅いぞ由比ヶ浜。これが「覆水盆に返らず」だ。英語だと「こぼれたミルクは戻らない」だけ。原文は帰国子女の雪ノ下に聞け。

周囲を見渡すと、ニヤニヤ顔の男子連中、少々複雑な笑顔を浮かべる女子一同。そして、顔を真っ赤に染めて何かうわ言を呟く雪ノ下。「先に言ってしまうなんて、ずるいわ…」

とか言っていたらしいが、俺にはわからなかった。

文化祭の打ち上げは、男子のバンドと女子のバンドで合同で行うことになった。

会場である奉仕部の部室へ移動すると、なぜか生徒会の面々や、三浦、海老名、小町、それに、関係ない戸部とか他の奴らまで来ていた。

先に来ていたバンドのメンバー達と合流する。

「比企谷、今日は大活躍だったな」

まず最初に小町や戸塚を愛でたかった俺の気持ちを阻むかの如く葉山がちよっかいを出してくる。思えば、このバンドのせいで随分葉山と話す機会は増えたな。

「ばーか。練習とか楽器とか曲のアレンジとか、全部お前の手柄じゃねえか」

「ははは、でどうだった？」

「何が」

ジンジャーエールの炭酸にむせ返りながら葉山を軽く睨む。

「たまにはいいもんだろ、自分が表舞台に立つのも」

「おう、人生で一回くらいはいいかもな」

つまり、これで最後だ。

「はちまん、かつこよかつたよ。感動しちゃった」

戸塚可愛いとつかわしい。同じく天使の小町もキラキラした笑顔を向けてきた。

「うんうん、おにいちゃんすごかった。まさかあの“ごみいちゃん”がステージでヒッキーコールを浴びる日が来るなんて、もう思い残す

ことは何も無いねっ」

小町が可愛く俺の人生を閉じようとするその横から、可愛くない癖にやたら大きな声が響いた。

「八幡よ！ それでお主、どちらの女子と契りを交わすのか決めたのか？」

背後で飲み物を嘔き出す音がした。由比ヶ浜と雪ノ下だ。小町が慌てておしぼりを取りに走っていく。てか的を絞って言うんじゃないかねえよ。契りとか。

「あ？ てめえにや関係ねーだろっ」

「いや、我だけ幸せになるのも、その…」

「は？」

材木座の斜め横を見ると、確か生徒会の役員だったか、頬を赤らめた女子がいた。

「私の名は酒匂川佐和。本日より材木座義輝さまの眷属になった者ですわ」

あ。リハの時のタイムキーパー。しかし眷属って、こいつそっち側の人種だったのか。ダンジョンに出会いを求めるクチか。関係無いけど例の青い紐を由比ヶ浜に着けてみたい。

「いやあ、ドラムを叩く我に見惚れたらしいのだが…」

妄想から引き戻されるとそこには、材木座の何ともしまりの無い、でかい顔面がある。

聞けばリハーサル時から材木座が気になっていたらしい。

類は友を呼ぶ、か。類が見つかってよかったな材木座。あとで正座な。

「…ちよっといいか比企谷」

声をかけてきたのは葉山隼人だった。

19 比企谷八幡は決意する

19 比企谷八幡は決意する

「…ちよつといいか比企谷」

葉山が真剣な顔を向けて部室の外を見遣る。どうせロクでもない話だろうが、俺は葉山と二人で廊下に出る。

リア充とアイコンタクトなんて、俺もやるようになったものだ。

階段の近く、もう暗くなつた窓の外を葉山は見ている。くそ、絵になるなこいつ。

「そういえばおまえ、機材トラブルなんて嘘じゃ」

部室から離れた階段の辺りで、俺の言葉を遮るように葉山は俺に向き直る。

「君も、そろそろ答えを出す時期なんじゃないか？」

「さっさん周囲に聞かされた言葉だ。」

「おまえには関係ない。それより機材」

「あるさ。雪ノ下さんは幼馴染だし、結衣は友達だ」

うざい。これだからリア充どもは。

「はいはいわかったよ。ご忠告感謝…!?!」

顔に衝撃が飛来し、俺の身体は後ろに弾かれて倒れた。

冷たい床から上半身を起こすと、そこには葉山の拳と怒りの顔があった。

「ふざけるな!」

音を聞いて駆けつけた戸塚に支えられて、やおら立ち上がる。なんかムカムカしてきた。

そして気がついたら俺は葉山を殴り返していた。

部室の入口の方から悲鳴が上がる。

「お節介も大概にしやがれ! 俺はお前みたいに万能じゃねえんだよ!」

同じく後方に倒れた葉山に、思いの丈をぶつける。起き上がった葉山に胸倉を掴まれる。

「君がはつきりしないから雪乃も結衣も苦しんでるんじゃないかつ」

もう周りは目に入らない。痛みに酔ってしまった俺も葉山の袖を掴んで揺さぶっていた。

「馬鹿野郎、俺だって苦しんだよ。二人を考えると頭が…爆発しそうなくらいにな」

そこで、俺の勢いは潰えた。

糸が切れた操り人形のようにリノリウムの冷たい床にへたり込む。

「それに…二人とも、俺なんかには勿体無い」

その言葉が更に葉山の火力を強くする。

「そうやって自分を蔑んで！ 他人と線を引いて！ …それで比企谷は満足かも知れないがな。いい加減気づけよ」

俺は、もう葉山の顔を見られなかつた。葉山の言葉に対する反論は、もう出来なかつた。

「お前はもう、自分を卑下する必要は無いんだよ。お前は、あの二人に認められた人間なんだぞ」

解った様なことを言うな。利いた風な口を利くな。

お前がしたことは、俺の否定だ。

長い長い闇の中で、やっと見つけて掴んだ蜘蛛の糸を、お前は否定したんだ。

蜘蛛の糸すら見つけようとしなかつたお前が。

「…うるさい、うるさいうるさいっ！ てめえに俺の気持ちちが！ …苦しみか…」

解って欲しかった。

俺が独りでどれだけ苦しみ、恨み、悲しみ、諦めてきたかを。解らずにいて欲しかった。

俺が俺である為に見つけた、作り上げた妥協という欺瞞を。見過ごして欲しかった。

俺が俺に吐き続けてきた嘘を。

見逃して欲しかった。

弱さゆえに求めた虚ろな強さを。

もう逃げ場はない。

そんなこと解ってるんだよ。

最初から俺に逃げ場なんか無かったんだ。

俺は俺から逃げることは出来やしないんだよ。

俺の中の感情から。

俺の抱いてしまっている自分勝手なおぞましい期待から。

それをお前なんかには理解したような顔をされたくないんだ。

理解しろよ。クソリア充め。

「葉山、比企谷、そのくらいにしておけ」

喚き散らす俺とそれを見下ろす葉山の間を割って入ったのは平塚先生だった。

「葉山よ、お前がこんなに怒っているのは初めて見たな」

「比企谷、まさかお前が葉山を殴り返すとはな」

満足気に微笑む平塚先生の後ろで怒気を放つ影ひとつ。

「ヒキオ、あんたなに隼人のこと殴ってんの」

炎の女王こと三浦優美子。

俺を見据えたその目は、明らかに苛立っていた。

「ヒキオさあ、いいかげん自分の価値を認めなよ。隼人が本気で誰かに意見するなんて、あーしだつて見たの初めてなんだから。そんだけ気にかけてんだよ、あんたを」

炎は尚も勢いを増す。氷の女王の視線など歯牙にもかけずに。

「それに、あーしだつてあんたを認めてる。今日のおんたも、その、カツコよかったし」

全てを焼き尽くすかの如き強烈な熱は、既に陽だまりのような柔らかな温かみに変わっていた。

「とにかく、焦んなくていいからさ。あの二人のこと考えてやんなよ。出来たら結衣を選んで欲しいけど、それはあんた次第だからね」

言いたい事を言い終えた炎の女王三浦が去り、毒気を抜かれた葉山と俺だけが冷え込む廊下に残る。

「比企谷…悪かった」

本当に済まなそうに頭を垂れる。その表情には、こうなる筈ではなかったと言いたげな後悔の念が見て取れた。

「比企谷のことを解った様なことを言ってしまった。すまない」

そこにはリア充葉山の面影は無い。あるのは悩み多き高校生の、ごくありふれた顔だった。

「あ、ああ。人に殴られると、超いてーんだな」

殴られた左頬を撫でながら、悔し紛れに葉山の足を軽く蹴っ飛ばす。

「…おまえのパンチも結構痛かったよ。比企谷」

がしつと肩を組まれる。そこには青春を謳歌する、誰もが知る葉山の顔がある。

てか葉山って結構いい匂いすんのな。さすがリア充イケメン。

「…なに友達ヅラしちゃってんの。別にいいけどよ」

正直こういうのは、嫌いというか苦手意識があった。そもそもぼっちの俺には殴り合う相手もいなかったし、こんなのは架空の世界の創造物だと思っていた。

「機材の件、悪かったな。ちよつと意地悪したくなつたんだ」

「もういい、それは。おかげで…なんだ、あいつらに歌を聞かせられたし。恥かいたけど」

「…やっぱりキミは随分変わったな」

葉山に肩を抱かれて歩きずらい俺に平塚先生の微笑が近づく。

「互いの拳と拳で語り合う。うん、これが青春だ」

顛末を見届けた平塚先生がしきりに頷くそのまた後ろで、人知れず海老名が発症していた。

「ぐふふふ…隼人くんと比企谷くんが互いの身体を…キマシタワー！」

「おい姫菜っ」

三浦の声が遠くの廊下に響くが、海老名の発作と鼻血は止まらない。

こいつもう、何でもいいんだな。リーズナブルなヤツだ。

葉山と部室に戻ると何故か歓声で迎えられた。

「おかえりお兄ちゃん、いやあ青春しちゃってるね〜小町嬉しいよ」

兄が殴られて嬉しい妹って。しかも涙流して喜ぶって。その横には目を赤らめた由比ヶ浜。

「ヒツキー…大丈夫？ でも、ちよつとカツコよかつたよ」

おいおまえ、葉山の友達だろ。葉山の心配もしてやれよ。

少し離れたところで川崎と談笑していた雪ノ下も俺を見て微笑む。

「あなたにそんな暴力的な一面があったなんて…意外だわ」

そこだけ切り取るんじやねえよ、赤い顔した雪ノ下さんよ。お前が

川崎と打ち解けて談笑してるほうが意外だわさ。

ふと、『深夜高速』という曲を思い出した。

この曲の歌詞に「青春ゴツコ」という言葉がある。

さつきまで展開していたこと。それは俺が忌み嫌っていたその「青

春ゴツコ」なのだろう。

若さ故に逸り、未熟さ故に苛立つ。

それは「ゴツコ」などでは無く、一種の通過儀礼みたいなものなの

だろう。

恋愛も然り。

未熟な者同士の恋愛に間違いは付き物で、それを経験し糧とし、人

は成熟していくのだろう。

だったら、俺は、この時点での答えを出せばいい。

答え合わせなんか未来の結果に委ねてしまえばいい。

たとえば、それが間違っていたとしても。

20 祭りのあとは始まりでもある

20 祭りのあとは始まりでもある
打ち上げの片付けが粗方終わった。

残るモップがけや机の整頓は奉仕部が受け持つことになり、他の連中は一足先に二次会のカラオケに向かった。

部室には、奉仕部の部員だけが残った。

俺の鬱屈とした物語は、ここから変わり始めた。

最初に出会ったのは、氷の女王、雪ノ下雪乃。

あの時は、どうなることかと本気で思った。俺の人生詰んだとまで思った。

程なくして依頼人として現れた、由比ヶ浜結衣。

彼女は、俺が毛嫌いしていたトップカーストの一人だった。

その時は全員が入学式当日に俺が轢かれた事故の関係者だとは知らなかった。

そして全てが発覚。

思い返せば、それからの俺は最低で最悪だった。

由比ヶ浜の優しさを疑い存在を遮断し、雪ノ下の高潔さを疑い存在を否定しようとした。

それでも、二人は俺の居場所でも在り続けてくれようとした。

少なくとも俺にはそう思えたんだ。

そして去年の文化祭。

そして修学旅行。

俺は二人を傷つけ、三人は一人ずつになった。

それは生徒会選挙で如実に現れた。

それでも由比ヶ浜結衣は、この場所を守るために必死だった。

去年のクリスマス。

海浜総合高校との合同クリスマスイベントで、雪ノ下雪乃は俺と一緒に泥を被ってくれた。

デイスティニーランドで雪ノ下雪乃が呟いた言葉。

『いつか私を助けてね』

海浜総合を巻き込む形で催したバレンタインのお菓子作り教室。
バレンタイン当日にひとつの結論を求め、自身を卑怯と断じた由
比ヶ浜結衣の言葉。

『あたしは全部ほしい』

全てが俺を構成する要素となっている。

空虚だった俺の内心を埋め尽くしている。

それは憂いと望みを内包し、時に癒しをもたらす時に牙を？く。

苦しみと喜びはいつも表裏の如く存在し、喜びだけが胸中に書き留
められる。

得ることは失うことと同位相で在り続け、裏切られたくないくせに
期待をする。

そんな問答は幾度と無く自分の中で繰り返してきた。

我ながら全く厄介である。

考えて考えて漸くひとつの解を導き出せても、その検証が済むま
で、或いは確証が得られるまで動けない。

仕方がない。俺はこの方法しか知らなかったのだ。

今から選択する方法は未知なのだ。

片づけが全て終わり、後は施錠して帰るだけ。

しかし、俺にはまだ為すべきことが残っていた。

それは、この場にいる三人が傷つくであろう事。

だがそれをしなければ前に進めないのなら、通過儀礼として必要な
らば、するしかない。

たとえ、共に自分以外の誰かを傷つけることになっても。

由比ヶ浜結衣と雪ノ下雪乃に伝えなければ。

「話がある。聞いて欲しい」

俺の緊張感が伝わったのか、いつも和やかな部室の空気が重苦し
い。

俺は、静かに、努めて冷静に、前置きを話し始める。

「まず、今からいうことは俺の自惚れかも知れない。だが今日、今、答
えられるだけの解を出そうと思う」

由比ヶ浜と雪ノ下の、緊張が伝わる。

「まず今日のライブだが、アレは何だ」

二人は顔を見合わせて俯いている。

「あんなやり方はもうしないでくれ。嬉しかったが、それ以上に恥ずかしいから」

二人は気まずそうにしていたが、嬉しかったと伝えたことで安堵の顔になってくれた。

そして、本題。

由比ヶ浜結衣と雪ノ下雪乃、そして俺、比企谷八幡。その三人をそれぞれ頂点とした三角形。今日、俺はその三角形を崩そうとしている。

「俺は今まで、おまえたち二人の気持ちに気づかない振りをしてきた」

「あら、あなた私達に好かれているとでも…」

重苦しい空気に耐えかねたのか雪ノ下が割り込むが、手で制す。

「悪い雪ノ下、今は茶々を入れないで聞いてくれ」

そう、とだけ呟き、真剣な表情となる。

「さつき葉山に怒られた。二人の為に答えを出してやれ、とな」

この二人も部室のドアの隙間から見ている、だろう。

「云って置くが、葉山に言われたから答えを出すわけじゃない。俺が、答えたいと思ったからだ」

そうだ、これだけは他人の責任には出来ない。あくまで自分の意思による、自発的な行動でなければいけない。意味がない。

「とはいっても、今まで俺に向かってそんなことを言ってくれる奴はいなかったし、また、俺自身が再び誰かを好きに…誰かから好かれるなんて、考えもしなかった」

要領も要点も得ないまま、見切り発車の状態で言葉を搾り出す。

「俺は卑屈で、根暗で、人を避けてきた人間だ。その俺が、誰かを選ぶなんて、おこがましいとずっと思ってきた。でも、このままではいけないのも事実だ。卒業すれば疎遠になるかもしれない。また、新しい人間関係の中で生きていくことを強いられたりするだろう」

ああ、と呟いたのは由比ヶ浜だった。これから何を告げられるかを悟ったのだろう。

「だから、今この俺が出す答えが本物なのか。それは未来の結果でしか答え合わせは出来ない」

自分でも解っている。今ほざいているのは言い訳だ。

だが、怖いのだ。こうでもしないと自分が保てなくなりそうで、だから要らぬ話を延々としてしまっている。

だが、覚悟は決まった。解も決まっている。ならば後は。

21 彼と彼女と彼女の物語はまだ終わらない

21 彼と彼女と彼女の物語はまだ終わらない
言ってしまった。

ついに、俺は取り返しをつかない事を告げてしまった。

自分の願望を、叶う筈のない、目の前の二人が承服する筈の無い、願望を。

「…あなただって、どうしようもないわね」

「ほーんと、ヒツキーって最低」

無理は無い。俺自身、こうなることを予測していた。

奉仕部の居心地の良さ。

そこには当然のように雪ノ下雪乃がいて、由比ヶ浜結衣がいた。

二人とも、俺のかけがえの無いものになってしまっていた。

俺は悩んだ。他人のことをこんなに考えた日々はなかった。

日々結論は違った。

由比ヶ浜が優しくしてくれた日はそちらを考え、

雪ノ下が微笑みを見せてくれた日はそちらになびく。

俺が自身のどうしようもない優柔不断さに気づいた時期だ。

だから。だからこそ今日という日、この場所まで自分を追い込んだ。

そして一応の結論は出た。

しかしそれは到底受け入れられるものではなかった。

目の前の二人も。自分自身でさえも。

でも。

文化祭のステージで、二人は心を見せた。想いを見せてくれた。
こんな俺に。自分の気持ちを絞り込めないような、駄目な俺に。
決められない俺に残された方法はひとつ。

正直でいることだ。

だから告げた。

二人とも好きだ、と。

しかし、その解が正しかったかどうかは、目の前の二人を見れば一目瞭然だ。

いや、その前から解っていた。
まちがっている。

でも、その間違いを正す術を今の俺は持っていないかった。
愚考している間、二人の溜息だけが耳に響いていた。
溜息交じりの沈黙を破ったのは由比ヶ浜だった。

「ゆきのんは…これでいいの？」

由比ヶ浜の問いかけに答えながら、冷たい目で俺を睨んだ雪ノ下が
一歩、歩み寄る。

「良いわけではないでしょう」

由比ヶ浜も真つ直ぐ俺を見据えて俺に近づく。

「そうだよねー」

「ええ、彼には失望…いいえ絶望させられたのだから」

目の前で会話を繰り返す二人の視線は、俺に固定されたように動かない。宛らそれは、獲物を狩る肉食動物の眼に思えた。

「じゃあ、どーしよつか、ゆきのん」

にやり。由比ヶ浜の口角だけが上がる。

「そうね…じゃあ」

同様に口角を吊り上げた雪ノ下が由比ヶ浜に耳打ちをする。

俺はどうなるのだろうか。いや、二人はどうするのだろうか。

何をされても、どんな酷い仕打ちをされても甘受するしかない。俺はそれだけの間違いを、罪を、犯してしまったのだから。

二人の想いを踏みにじるといふ罪を。

やけに長い耳打ち、いや密談か。それが終わったと同時に二人は歩調を合わせてゆっくりと俺に近づく。

いや、正確には俺を追い詰めている。その証拠に俺は二人に気圧されて後ずさりをし、もう背中には今は使われていない黒板が迫っていた。

二人との距離はあと数メートル、いや、数歩。一足飛びなら殴りかかる距離だ。

俺は、二人に対する申し訳なさと恐怖で、目を開けていられなくなつた。

上履きのゴム底が床を鳴らす音だけが左右の耳に鋭く響いて、やがて心臓を刺す。その度に動悸が乱れて息苦しくなる。

これは…新たなトラウマ決定だな。

二人の足音が止まる。俺の目の前に来てしまったのだろうか。

相変わらず目を硬く閉じた俺は、ついに背を黒板に預けてしまう。

「…比企谷くん」

「…ヒツキー」

自ら閉じた暗闇の中、左右の耳から別々の声が鼓膜を揺らし、脳を揺さぶる。

再び訪れた静寂の闇の中、微かに衣擦れの音がした。

やられる。平手打ち、いやグーパンか。もしかしたら腹を蹴られるかもしれない。

情けない。さっき、どんな仕打ちも受け入れると決めたのに、俺の身体はダメージを軽減しようとしている。

もういやだ。こんな自分。罰さえまともに受けられない自分なんか、嫌いだ。

強張った全身の筋肉を意図的に緩める。

「すまない。今身体の力を抜いた。どんな仕打ちも全部受け入れるから…気の済むようにしてくれ」

右の耳に、フツつと鼻で笑う声があった。

「良い覚悟ね。では遠慮なくそうさせてもらおうわ」
「オツケーゆきのん、こっちは任せて」

左右からの同時攻撃、か。こんなときまでこいつら仲良しだな。

最悪、この二人の友情だけは守られるだろう。いや、そうであつて欲しい。

「いくわよ、比企谷くん」

「覚悟してよ、ヒツキー」

左右から刑の執行が宣告される。

両頬に…指？

いや、顔に息がかかっている。

なんだ、なんの序章だ。これから何が起きるんだ。

恐る恐る薄目を開けてみると、眼前、いや、もう二人の顔が当たっている。

じゃあ、この両頬に当たる柔らかい感触は――

「…ふう」

「…んはあ」

二人の吐き出す息が両耳をくすぐる。

両頬から唇を離れた二人は、しばし熱を帯びたように惚け、それからすぐに俺を睨んで笑う。

「お、おまえら…」

「あなた言ったわよね。どんな仕打ちも受けると」

「うん、あたしも聞いた。だから、これはその仕打ちの…んー、イントロ?」

「お、おかしいだろ。俺はおまえらに、その…酷いことを言ってしまった、のになんで」

理解の範疇を超えた俺は、為す術なく頭を抱えてしゃがみ込む。

「おー、ヒツキーが混乱してるっ」

おい。

「なかなか見られる光景ではないわ。貴重ね」

おいっ。

「さてヒツキーくん。キミのこれからの罰を発表します」

両脇を抱えられて、再び黒板を背に立たされる。

「まさかあれで終わりだとは思っていないわよね?」

あ、ああ。勿論。どんな仕打ちも受ける覚悟は――

「罰は、あたしたち二人を、これからもちやんと見続けること」

「そして卒業式の日に、どちらを選ぶかを決めてもらうわ」

さっきの密談は、その話だったのか。

「ま、まあ、今回はさ、あたし達が勝手に告白…しちやっただじゃん?」

「だからあなたにも執行猶予、時間を与えるわ。それに」

雪ノ下の表情が柔らかくなっていく。

「好きと言ってもらえたこと自体は、その、う、嬉しかったのは確かなのだし」

「そうだよねー、ヒツキーが気持ちを伝えてくれただけでも進歩だよ」
由比ヶ浜に抱きつかれるが、いつものように拒否できない。

「ゆきのんゆきのん、あたしたち、三角かんけーだねっ」

「はあ、何故あなたが喜んでいいのか、少々理解に苦しむわ」

「いーじゃん、卒業式までは三人でいられるんだし。あ、三人でいちやいちやしちやう〜?」

「…おい、三人でつて」

「あなたに発言権は無いのよ比企谷くん。少なくとも今日はね」
相変わらず両脇を抱えられた俺に新たな脅威が押し迫る。

廊下に足音が響く。

「おにいちちゃん遅い、つて…:…ええ? ええ?」

元気よく部室のドアを開けた小町の前には、満身創痕の兄とその両腕に絡みつく美少女二人。

「ま、まさかのリアルハーレム!?!」

呆気にとられている小町を見て由比ヶ浜が笑う。釣られて雪ノ下も嘔き出している。

俺は…笑えない。まだ整理がつかないどころか、現状把握も覚束ないのだから。

「小町さんには後でゆっくりと説明するわ。この期間限定の三角関係の理由をね」

俺の両脇を抱えたまま、雪ノ下と由比ヶ浜はニヤリと微笑む。

「ふえ…ええ、ええ〜!?! これはどういうことなのっ、ごみいちちゃんっ!」

「どうやら俺の青春ラブコメは…卒業まではまちがい続けられる、らしい。」

了

22 月影 【後日談】

22 月影 【後日談】

く 一年後 く

その夜、俺、比企谷八幡は市内のライブハウスに居た。

今日は総武高文化祭二日目。有志団体の打ち上げである。

今年の文化祭には、葉山隼人、三浦優美子、戸塚彩加、材木座義輝による有志バンドが参加した。俺はゼミがある為に行けないうと葉山に伝えると、打ち上げには是非来いと半ば脅されてここに来たのだ。

重々しく毒々しい、朱で塗られた両開きの扉を開けると、そこは既に音の真っ只中だった。

スピーカーチェックなのか大音量で鳴り響く、歪んだギター。

その音を掻き分けて奥へと分け入る。

ステージの前まで行くと、ギターを鳴らす葉山の右手が止まる。

「よう比企谷、来てくれたのか」

てめえが来たっていったんだろ。しかも断れないように陽乃さん経由で。

「まあ、腐れ縁だからな。いろんな意味で」

適当に吐いた答えを、葉山も適当に流す。

ん？ 遠くのほうから天使の気配がする。

「はちまーん、久しぶりっ。来てくれたんだねっ」

うん、俺の戸塚リーダーは未だ健在だな。

「今日はぼくも久しぶりにベース弾くんだよ。ちゃんと、見てて、ね」

勿論だ。戸塚の為なら俺は、俺は…

「おう、戸塚のワンマンショーなら最高なのにな」

「もうっ、はちまんったらっ」

よし、戸塚の頬を赤く染めたぞ。これでもう俺はいつ帰ってもいいな、うん。

「…ヒキオ、何赤い顔してんの？」

おお怖っ。三浦の美貌と怖さは大学生になってから益々磨きがか

かってるな。

つーか三浦、ギター弾けたんだな。

「違うし。は、隼人が…あーしにはギターが似合うっていうから…ふんっ」

おお、可愛いじゃねえかよ三浦さん。まるで恋する乙女に見えるぞ。

…おっと睨まれた。

この後夜祭に位置づけられた打ち上げの目玉は、文化祭に参加した有志バンドの演奏だ。ここに集まるほとんどは、葉山の演奏が目当てだ。

その証拠に、女子たちの人数が異様に多いし、必要以上に三浦がピリピリしてる。

実はこのバンドは、去年の文化祭のライブに味を占めた材木座と、それに同調した葉山が作ったバンドである。つまり、誠に遺憾ながら材木座のバンドなのだ。

「おー、ブタ將軍。ドラマー姿も様になってきたじゃねえか」

件の、見知った肉の塊に声をかけてやる。

「ヌフン、さもありなん。それもこれも愛しいマイハニーのお陰である。ヌフ」

「…気持ち悪さも健在のようで安心した」

そういえばこいつ、三年の時の文化祭で彼女が出来たんだよな。俺より先にリア充に成り下がりがあって。まあ、相手はこいつと同族だから許すけど。お似合いだぜ。

有志バンドのメンバーをひと通りいじり終わったことだし、そろそろ客席に行っておくか。

立ち見のフロア、客席に行くと既にかかなりの人数が集まっており、その中には見知った顔もちらほらと混じっていた。

同じクラスだったらしき顔が散見できる。その後ろのほうは、総武高の在校生か。

あつちは、去年の文実委員長か。そして向こうには…一昨年の文実委員長がいた。

一 昨年の文実委員長、相模は取り巻きの二人を左右にはべらせ、こちらを見ながら何かを話し笑っている。てか、あいつら卒業しても一緒かよ。

ま、仲がいいのは良いことだな、うん。その様子は多少イラつくがまあ捨て置こう。

「おお、比企谷。久しいな」

背後から声をかけてきたのは、学生ばかりのこの場所には不釣合いな美女。

「何言ってるんですか平塚先生、先週もラーメン屋に拉致されたばかりじゃないですか」

「以前も言ったが、もうお前は生徒ではないんだ。友人として“静”と呼べ」

「はいはい、静さん」

平塚：静さんは、何というか、大人の魅力をこれでもかというくらいに見せびらかしている。特に胸の辺りの見え具合に大人の魅力が集中している。

簡単にいえば「胸元ぎっくり」なのである。

そんなの在校生男子に見せちゃダメですよ。本気で静さんの貰い手が教え子になってしまふ。

「はは、どうだね、仲良くやってるかね」

大人の格好をして、子供みたいにヘッドロックとかしないでください。割とマジで怒られるんですからね。でも柔らかいからいいか。

「先生：静さんも相変わらず意地が悪いですね。どうせあいつから聞いているんでしょ」

そう。いつだって俺の情報は筒抜けだ。これは在校時からのことなのでもう慣れてしまった。要は俺がしっかりしていれば大丈夫なのだが、それが一番難しいのである。

曰く、人とは流されるものである。

「まあな。仲良くやってるなら結構結構…ん、今日は一人か？」

辺りを見回して静さんは小首を傾げる。

「ええ、今日は家の用事があるらしくて。遅れて来ると思います」

ヘッドロックを優しく解くと、そこには俺たちの教師だった平塚先生の顔があった。

「そうか。まあ、楽しんでいきたまえ。久しぶりの“仲間”をな」

颯爽と歩く、タイトスカートから伸びる足を眺めていると、気配を感じた。

「みーたーぞー」

はっ、殺気。

「なーに平塚先生といちやいちゃしてんのさ」

なんだ小町かよ。おまえは今年の実行委員なんだから、もう少しこの場を仕切れよ。

「まったく、ごみいちゃんは…お姉ちゃんに怒られても知らないよ？」

それだけは、あいつに告げ口するのだけは勘弁してくれ。今日はいないから良いが、もしここにいたら間違いなく俺は重いペナルティを課せられてしまう。

壁に沿って並べられた円テーブルのひとつに目をやると、戸部たちの姿があった。

「おう、ヒキタニくんじゃん。久しぶり〜」

相変わらずだな戸部。

「もう、何度言えればわかるかなあ、ヒキタニくんじゃなくて、ヒキガヤくんだよ」

すっかりここは定番の二人だな。つーか海老名さんも大概「ヒキタニ」って呼んでたよな。

「よう、戸部も海老名さんも元気そうで何よりだ」

「ね、ね、久しぶりの“ハヤハチ”見たいなあ」

海老名さんも相変わらずですね。てか久しぶりも何も、一度たりともありませんからね。

程なくして、立食パーティーの形式で後夜祭は幕を開けた。すでにステージ上では葉山たちの演奏も始まっている。

三浦優美子は器用にギターを弾きながら歌い、時折葉山とアイコンタクトを交わして笑っている。

葉山はギターを弾きつつバンド全体のバランスを保ち、戸塚は楽し

そうに低音を紡いでいる。

材木座は：ま、どうでもいいか。特筆すべき点はナシっ。

2曲ほど演奏が終わると、葉山がマイクを握る。

「総武高校文化祭の有志バンドによる後夜祭にお越しいただきありがとうございます。今日は高校時代を懐かしむ意味を込めて、懐かしい曲をお送りします」

聞こえてきたのは「十七歳の地図」

懐かしいなんてもんじゃないな。俺たちが生まれる前の、名曲だ。

まさにこの年齢になる年に、俺は平塚先生に奉仕部に放り込まれたんだ。

そこで、あいつら二人と出会えた。

思えば、俺の17歳は濃密だった。それまでの鬱屈とした生き方は、そこで音を立てて変わったんだ。

次の曲は「BAD FEELING」

これまたえらく古い曲だな。俺らのオヤジ達の世代向けだな。

だがこの曲は、今聴いてもカッコいい。

しかし葉山って、やっぱギター上手いな。

続いては、「ロビンソン」か。

この曲のドラムって難しいのに、ちゃんと微妙なモタリまでコピーしてやがる。材木座の癖に。

あんな奴でも彼女が出来るよと変わるのかな。俺もそうだけど。

次の曲は「小さな恋のうた」

お、静さんが頭を抱えだした。そうか「知らない曲ゾーン」に入ってしまったか。大学生には懐かしくても大人には：だな。

おっ、このイントロは「Long Train Running」だな。

あらら、静さんが俄然元気になってきたな。てかこの曲、1973年の曲だぞ。この人一体いくつだよ。でもカッコいいわ、この曲。ギターのリフなんか簡単なのにな。

これまた懐かしい「Sweet Memories」

ここで再び三浦優美子の出番か。

ん？ おいおい、葉山が歌うのかよ。昔の女性アイドルの曲だぞ。
：へえ。男が歌うこの曲もなかなか良いな。その証拠にほら、静さんが歌に酔いしれて泣いちゃってるよ。三浦の目も潤んでるし。

大人の女性と涙って、すごく絵になるもんだな。

ステージのまん前では相模グループがしきりに葉山にアピールしてる。せっかくの名曲なのに。こいつら、どこまでいっても無粋なヤツラだな。

大人しく曲を聴け。今はそれが葉山たちとこの曲に対する礼儀だ。

ここで一旦演奏が終わったらしい。ステージから降りてきた葉山と三浦に心よりの賛辞の拍手が贈られる。

「ふう。優美子、ギター上手くなったな」

「ま、まあね、ぎつとこんなもんだし。それよりあーしき、ヒキオの歌聴いてみたいんだけど。去年見れなかったし」

そうか。こいつは去年の文化祭はステージ見てなかったのか。残念だったな、俺はもうステージには立たないと心に決めたのだよ。

俺の思惑を他所に、葉山は顎に手を当てて一考する。

やめろよ、やめろよおまえ。

「うん。比企谷、おまえも1曲どうだ？」

ぎやあああああああああ！

言いやがったあああああ！

「はあ？ 俺はあれ以来ギターなんか触ってねえぞ」

隅の方で相模グループの嘲笑が聞こえる。なにあいつできんの？
って感じた。

「文化祭のとき演った曲でいいさ」

「いいね。はちまん、やろう？」

と、戸塚からのお誘い、だど？

「わ、我も叩くぞ。八幡大菩薩への奉納太鼓のつもりでな」

何だよ、今から演歌でも演るのかよ。

っーか、もうお膳立ては出来てるんだな。もう断れないんだな。

「…わかった。じゃあ、アレでいいか」

「ひ、ひ、久しぶりのハヤハチ、キマシタワ〜！」

海老名さんもブレないな…

アンコールの曲は俺たちのバンドの最後の曲。

「ずっと好きだった」

今思えば、かなり早い段階で好きになっていたのかも知れない。けれど、お互い不器用で、どこか間違っていて。

そのお陰で素敵な遠回りが出来たりして。

けれど、そのせいで何度も悲しい思いをさせたのかもな。つらい気持ちにさせたのかもな。

あの時――

お前が生徒会長に立候補するって聞いたときには正直驚いた。

今思えば、生徒会を奉仕部で占領するのも悪くなかったかな、なんて思うときもある。

卒業式の日。

おまえだけを呼び出したつもりが二人で来やがって。お陰で俺は証人立会いの告白をする羽目になって。

その後何故か三人でデートしたんだよな。

とにかく、俺はおまえら二人の友情が壊れなくて安心したけど。

同じ大学に通い始めて、学内で噂になったときには少し胆を冷やしたっけ。俺のせいでおまえが悪く見られるのだけは避けたかったけど、いつでもそ知らぬ顔で俺の横に居てくれたな。

それはすごく幸せで、すごく辛かった。

おまえに見合う男になりたいと本気で思い始めたのはその頃からだったな。

たまに三人で会うときは、以前の部室のような空気に自然となれたことが嬉しかったな。あいつは時々寂しそうな顔をするけど、おまえら二人が笑顔で話しているのを見ると、俺も幸せになれたんだ。親友同士のおまえ達には日常なのかも知れないけどな。

演奏が終わる。

大歓声が沸き起こる中、隅の方で相模グループだけがアホ面で固まっている。

「やるじゃん、ヒキオ」

「ヒキタニくん、久々のハヤハチをありがとう。今夜は捗りそうだね、戸部くん」

各々がそれぞれに歓談する中。

ステージの正面、向かいの壁のほうから足音が聞こえる。

それは、聞きなれた二人の足音。

世界一素敵な俺の彼女と、その親友。

「比企谷くん」

「ヒツキー」

「お、おまえら、いつ来たんだよ」

ちよつとは心の準備をさせろよ。未だにおまえら二人が急に現れると、卒業の時の告白のシーンが甦るんだから。あの死ぬほど恥ずかしい瞬間が。

「あなたが演奏を始める少し前よ」

そうですか事前に教えていただけるとありがたいのですがダメですか。

「うん、またヒツキーのライブが見られるなんて思わなかった。カッコよかったよね、ゆきのん」

あなたも事前予告をしないタイプの人間ですかそうですか。

「そうね、誠に遺憾なのだけれど、か、格好良かったわ」

ま、まあ、褒められるのは嫌ではないな。

「うんうん、惚れ直したよヒツキー」

そういうこというなよ人前で。

「あら、私はいつでも惚れているわ。もうぞつこんよ」

表現が古いんだよおまえは。

「ははは、比企谷くんは相変わらずモテモテだな。どうだい、もう一曲」

「うるせえよ。しかし俺の知ってる曲なんてそんなに」

「去年、演目の候補にあがった、あの曲がいいかな」

ベースを抱えた戸塚があつ、と声を上げる。

そうか、あの曲か。

「では、正真正銘今夜の最後の曲は——」

了